

<抜刷り>

富士見市立資料館調査研究報告

第2号

富士見市立考古館開館50周年記念号

2024.12.28

埼玉県 富士見市立資料館

講演記録	荒井幹夫	無我夢中 - 考古館創成期 -
講演記録	会田明	市民の好奇心が考古館を変えた
回想	和田雅子	とにかく熱かった
論文	和田晋治	縄文中期勝坂式期の猪装飾付土器
★論文	早坂廣人	花積下層～関山式土器について
事例報告	駒木敦子	公民館で「社会教育施設の専門職」について考えた
研究ノート	山野健一	石鳥居が伝える江戸と鶴馬の結びつき
研究ノート	田ノ上和宏	入間ごぼうに関する調査と考察
資料紹介	佐藤一也	上内手遺跡第10地点出土の陶磁器
資料紹介	高橋宏之	南通遺跡出土の下小野系土器について
資料紹介	大野朝日	新田遺跡第1号住居跡について
資料紹介	齋藤麻那	打越遺跡出土の押出型石匙について
資料紹介	菅沼慎太郎	南通遺跡近世墓坑と出土銭貨

※1 本文中の執筆者の肩書きは2024年3月31日時点です

※2 見開きの左側に偶数ページがくると見やすいように編集しています
両面印刷する場合はこのページごと印刷することをおすすめします
2ページずつ印刷する場合はこのページを飛ばして印刷してください

※3 抜刷り共通の表紙です。該当する記事に★を付けています

<論文>

花積下層～関山式土器について

早坂廣人（難波田城資料館）

内容一覧

はじめに

I. 研究史

- 1) はじめに 2) 遺跡発見期（1888～1925） 3) 型式制定期（1926～39） 4) 細分模索期（1939～70）
- 5) 段階設定期（1971～86） 6) 群馬編年期（1986～1997） 7) 関山式の再検討（1998～2012）
- 8) 花積下層期の地域関係（2015～現在）

II. 筆者が考える「花積下層式」「関山式」

- 1) 「型式」の特徴 2) 筆者の編年観 3) 花積下層期の地域差と上川名式 4) 文様と縄紋 5) 大別の境界
- おわりに

はじめに

富士見市の遺跡調査の歴史は、縄紋早・前期の貝塚遺跡が基軸となってきた。それらは、土器の編年研究にも大きな役割をはたしてきた。

筆者は、かつて前期中葉・黒浜式および前期後葉・諸磯式の研究史をまとめたことがあり、変遷観も述べてきた（早坂 2011, 2016）。前期前葉・花積下層～関山式は、正面から取り扱ったことが無い。最近になって、本市の若手職員に、前期前葉の土器編年について解説する機会があり、その際に研究史も整理した（若手職員には概要のみ話した）。本号の趣旨にも適うので、整理した結果に加筆し、研究史（I）と、筆者の花積下層・関山式観（II）を示す。

I. 研究史

1) はじめに

関東地方の前期前葉の土器編年に関する研究史としては、谷藤保彦 1999 のほか、花積下層式は渋谷昌彦による記述（渋谷 1983.04, 1995）がまとまっており、関山式は黒坂禎二による解説（黒坂 2006.02, 同 05）が明解である。ただし、それぞれの起稿目的から、記述が省略された部分があり、見落とされた点もある。たとえば、1970～80年代の関山Ⅱ式の研究は紹介さ

れることが少ない。山内清男や甲野勇の初期研究についても、他型式に比べ検討が深まっていない。それらを補うようにしたい。

研究史を上掲の7時期に分けてみた。細かくみれば花積下層式と関山式では研究史の画期がずれるが、一応、上の区分ごとに記述していく。一連となる研究が、設定した区分をまたぐような場合は、区分にこだわらずに紹介する。

飛ばし読みの便のため、花積下層式に関する項目に★、関山式に関する項目に■を付けておいた。なお、装飾に関する用語は、原著の表記を尊重するように努めた。

2) 遺跡発見期（1888～1925）

土器の編年研究が本格化する以前、珍品収集ではなく遺跡分布の確認を目的とする調査により発見された諸遺跡が、後の研究の基盤になった。特に、阿部正功による1888～94年の一連の分布調査で、多数の遺跡が発見・報告された（早坂 2015）。前期前半の編年にかかわる遺跡としては、花積・関山・黒浜（炭釜屋敷）・貝崎・側ヶ谷戸・黒谷・貝塚山・水子の諸貝塚が阿部により発見・報告された（未報告だが「菊名村蓮勝寺丘貝塚」も踏査した）。

3) 型式制定期 (1926 ~ 39)

1. 概要

優品採集が重視されていた時代は、環堤状貝塚に伴わず、壊れやすい、前期前半の土器は無視されがちだった。山内・八幡・甲野が層位的編年に取り組むようになると、最古級の土器として注意されるようになった。

2. ★■研究の始動

1926年、青森県これかわ是川一王子貝塚と神奈川県まんだ万田貝殻坂貝塚で、「厚手式」より下層から出土した土器が、粘土に繊維を混入した痕跡があることが、山内清男やまのうちの おと八幡一郎やわたにより認識され、「繊維土器」の研究が始まった(山内 1929.05)。

同年、大山柏が史前学研究所を設立し、翌27年から、甲野勇こうのの提案により、貝塚の位置と貝種の関係によって、石器時代遺跡を編年する共同研究を始めた。翌28年には、埼玉県内の貝塚を多数調査した(大山ほか 1933)。

同28年、山内は編年研究成果の概要を発表した。翌29年、山内は史前学雑誌に、現在の早期後半から前期に相当する関東・東北地方の編年研究を発表した(山内 1929.05)。大きく、(A)繊維を混入し内面に条痕がある型式、(B)繊維を混入し内面に条痕がない型式、そして繊維直後の型式の3群に分けた。関東の(B)は、自ら調査した上本郷貝塚例と、史前学研究所の黒谷・木曾良例、1925年に人類学教室(松村瞭)が調査した高坂貝塚例等の所見により論じた。関東の繊維土器に、円筒土器下層式 c・d 類のような燃糸圧痕が無いことに留意した。この年の5～11月に書かれたと推定された伊東メモ⁽¹⁾では、ダイギ2と3の間にすきまがあり、その横にナカイカツカ I (円筒下層) c が書かれ、I d はダイギ3と4の間に対応する。東北の南北で、無繊維土器への移行に2型式の時間差を認めがたい意識が反映したのだろう。

(1) 山内が編年表を書いて伊東信雄に渡したもの。伊東 1977。以下は中村編 1996 掲載写真の観察による。

3. ★■「蓮田式」命名

1930年1月付けで発行された史前学雑誌 2(1)では、甲野 1930(p26)と杉山 1930(p97)で“蓮田式”の語が用いられた。前年9月を発行日とする甲野 1929 では、万田貝殻坂出土の繊維土器を“所謂諸磯式に近似”と表現した⁽²⁾。「蓮田式」はこの間に命名されたと判断できる。命名の中心者は大山だろう(杉山は“大山公の発見に係る蓮田式”と表現)。山内による分類を受け入れつつ、対抗して命名したといえる⁽³⁾。

(2) また、“二、三の破片中には雲母の細片を混ざる”とも注意している。早坂 2017 で見落としたが、釈迦堂 23 式の研究史において注意すべき記述である。

(3) 筆者の知る範囲で「指扇式」の文献上の初出は、田沢 1932 である。大山と親しかった田沢が、当時史前学研究所で用いられていた語を使ったのだろう。大山ほか 1933, p53 には“指扇に於ては … 諸磯式に近き … 其後に繊維土器と称せられた或るものであり、後に研究所に於て協議の上、これを指扇式と命名した”とある。

4. ★■赤星メモ

30年1月、山内は赤星直忠採集資料(主に三浦半島)の調査を行った。赤星旧蔵の真福寺貝塚報告書の見返しに記された“山内清男談”編年表(大塚・平田 2007, p52)が、その際に教示されたと推定されている(平田 2007)。

“茅山”と“諸磯”の間、“大木 1-2”と並行する位置に“高坂”と記されている。“諸磯”の横には“大木 3-5”がある。そして、それら2段階にかけて“円筒式下層”がある。

山内の赤星資料観察メモは、山内 1937.02a で活字化された⁽⁴⁾。型式名として“蓮田”を用いている。ただし、聖徳寺裏山の出土土器型式に“田戸 I (下層式) 田戸 II (上層式)”という表記があり⁽⁵⁾、1930年8月の田戸遺跡調査所見が反映されている。とすれば、活字化の際に高坂から蓮田に書き換えた可能性もある。

“高坂”は、本当に山内が用いた型式名だったのだろうか。

山内 1929.05 で観察した関東地方の資料のうち、人類学教室所蔵で、綿密に観察しやすかったのは高坂貝塚である。赤星の資料にもまとめ、かつ、既に命名されていた諸磯式と、赤星

とともに命名する茅山式と同じ、三浦半島の遺跡を標準とすれば、同一地域の編年となり、地域差が紛れ込むおそれが少ない。高坂式という命名は十分にあり得た。

赤星訪問時点で山内が“蓮田式”の命名を知っていたかが一つの論点となる。

29年12月発行の『史前学年報 昭和四年』には、会告として、“蓮田式”の初出の史前学雑誌2(1)を、一月下旬発行とした旨を記されている。2月8日の講演会を過去形で書く無署名1930.03には、史前学雑誌2(1)の内容について伝聞によるとする記事がある。実際の配付は2月後半以降とみられ、それまで“蓮田式”は周知の語でなかった。

赤星資料観察と前後して、山内は史前学研究所資料も実見した。山内の訪問時期につき二通りの記述がある。

“旧臘上京。大山史前学研究所其他を訪ねられた”(無署名1930.01)

“本年正月”(山内1930.05b)

「旧臘^{きゅうろう}」とは正月に前月を指して呼ぶ語。無署名1930.01の学会消息は、日付が確かな事項では12月14日が最新である。以後数号の消息を見ると、発行前月の下旬以降の事象については予定として表現される。しかし、1号から明確な書き分けがなされたとは限らない。編集者(森本六爾)が私信などで知った予定を記事化し、校正までに訪問を実行したことを確認したのであろう。

現代と異なり、仙台から頻繁に上京することは考えにくい。東北大勤務時の山内の動きを見ると、私的研究のために上京するのは、夏季休暇期間と年末年始に限られるようである。正月休み(年末年始休)に上京し、その期間に観察をしたと解釈すれば、実際の観察が年末でも年明けでも、両記事の表現は矛盾しない。

山内は、史前学雑誌2(1)号配付以前、史前研訪問の際、あるいは甲野からの情報で“蓮田式”の命名を知っていた可能性は十分に有る。

筆者の推測はこうである。『繊維土器』論文

の発表後、関東の繊維土器の命名について迷っていた。(A)はカヤマ式が有力であり、(B)は高坂が候補の一つだった。赤星訪問時に、史前研の蓮田式命名は知っていたが、命名者の発表前に口に出すのは控えた。赤星へは、自らが候補としていた高坂式を型式名として用いたが、史前研の調査資料の充実と、史前研への配慮から、蓮田式を採用することにした。

(4) 同文献では“昭和7年1月これを拝見”とするが、観察所見の一部を公表した文献を“繊維土器に追加(2)(史前学雑誌1:52-53, '31)”とし、追加番号・巻号・頁・刊年のいずれも誤っていることから、拙速な原稿である。

(5) 山内自身による出版物で、細別をローマ数字で表わした興味深い例でもあり、後述のメモの解釈にも影響する。

5. ★■「結束」と「整正な撚糸圧痕」

山内1929.05で、円筒下層式c,dには口縁部に整正な撚糸圧痕、体部に結束ある帯状縄紋があると指摘し、大木1には結束ある縄紋がなく、稀に整正な撚糸圧痕があり、大木2には結束ある縄紋を伴うとした⁽⁶⁾。

山内1929.07で、宮城県室浜貝塚から新形式が発見され、体部に結束ある帯縄文を施すものが過半で、整正な撚糸圧痕による文様もあると紹介した。円筒下層式c,dに並行する可能性を見出した⁽⁷⁾。

山内1930.05aでは、編年表において東北地方の繊維土器後半を“大木1、2、室浜”と表現した。そのような時間順と評価していた可能性があり、少なくとも、室浜が大木1より古いという結論に至っていなかった。同論文中、「縄紋原体の末端」の項では“大木1又は室浜”とあり、「結束なき帯状縄紋」の項では“室浜式、大木1式”の順である。室浜式が大木2式よりも大木1式と共通点が多く、先後関係を迷っていると窺える。

山内1930.05aと同じ号に掲載された05bでは、赤星が収集した高坂貝塚の資料に“口頸部に整正な撚糸の圧痕による文様が屢々ある”と注意している。赤星の資料とは別だが、剣持・野内1985で報告された高坂貝塚の出土土器は、黒浜式古段階前半を主とし、少量の関山式、下

吉井～花積下層式からなり、撚糸側面圧痕は 1 片のみである。赤星の資料も前期前半各型式を含んでいた可能性が高く、蓮田式の細分の手がかりにはなりにくかったと思われる。

とはいえ、山内は蓮田式を一括りにしていたわけではない。山内 1930.05a には、各種の縄紋が存在する型式を示しているが、ループ状末端が数段重なる例 (p20)、結束がない帯状縄紋 (羽状縄紋。p24)、異條縄紋によるもの (p24) について“蓮田式の一部”という表現を使っている。現在の知見では、並列ループ紋は関山式の特徴であり、結束もループもない羽状縄紋は花積下層式と黒浜式に多い。異條縄紋は、関山Ⅱ式で合撚が目立つようになり、次第に附加条に置き換わり、黒浜式に続く。山内の記述は「蓮田式」の遺跡間の比較によるだろう。まさに“縄紋の調査が型式制定又は同定に役立ち得る” (p25) 例といえる。そして、山内 1930.05b には“この式の土器は一型式ではなく、陸奥や陸前の如く若干の細別があるものと思はれる。しかし私はこの方面の調査に必要な材料を持ち合わせない”と表現した。細別案はあるが、史前研調査の各遺跡の比較に基づくため、公表を控えたと思われる。この時点の細別案が二分か三分かは明らかでない。

(6) 早坂 2016 で触れたことがあるが、大木式標本写真 (中村編 1996) のうち、大木 1・2 式の 3 枚は、この論文のために用意したと推定する。なぜならば、①山内 1929.05 図版 6 は、山内から赤星に贈られた写真 (大塚・平田 2007) から影を抜いたものである ②大木 1・2 式標本写真の影の付き方は上記の写真と同じであり、同時に撮影された可能性が高い ③ 1・2 枚目の土器の組成は山内 1929.05 の大木 1 式の記載と対応し、大木 2 式の記載は 3 枚目の写真に対応する破片がある (この論文では、現在の意味の「結束」と縄紋末端の結節の区別が明確でない)。

(7) 山内旧蔵の室浜貝塚資料は、岡田ほか 2009 で公表された。前期前半は、幅狭結束羽状が主体だが、ループ文や大木 2a 式も少量含む。撚糸側面圧痕の口縁部文様を持つものは数片だった。

6. ★■甲野勇の分類

甲野 1935 は、1933 年に仕上げられたことが文中に示されている。くにたちふるさと文化館に所蔵される清書原稿も出版された文面と一致

する (鈴木素行 2000。筆者も確認)。

甲野は史前学研究所が調査した諸貝塚の土器を 8 つの群に分けて紹介した。これはそのまま、甲野の型式分類ではない。第一群は先後がわからない 2 型式 (茅山式、子母口式) を含む。これは仕方ない。第六群は阿玉台・勝坂・加曾利 E の 3 型式を含み、第八群は加曾利 B (・大森) ・安行の諸型式を含む。これは大山が、同一貝塚内の層位・地点の差を型式差とすることに非常に慎重である為、同一の貝塚で出土することが多い諸型式は一群にまとめたのである。甲野は、群内の類別の配列により型式差を示唆した。前期の貝塚は短期間の地点貝塚が主であり、遺跡による違いとして指摘できることから、大山も否定しきれなかつただろう。

甲野は「群」の下に一定の器形と装飾の組合せにより設定した「類」という階層を設けた。一時期の土器群をこのように捉える見方は、長谷部言人^{ことんど}・松本彦七郎が切り開いたが、彼等はそれを体系化しなかった。山内・八幡・甲野が、列島内の全時期・全地域を体系化しようと取り組んだのであり、後の世代に引き継がれた。甲野は、現在前期に位置する 4 つの群を、各 4～6 類に分類した。同じ形態では、型式を越えて文様配置も対応すると示唆した。

第二群は、文様として、口縁の網代状沈線文、隆起帯、撚糸押捺等があり、地紋は、圧痕が顕著でない羽状縄紋、貝殻背圧痕、“入り組むで波状を為す縄紋” (結節回転紋であろう) を指摘した (図 1)。

第三群は“主として索牛花状鉢形”だが“稀に片口状土器”もある。ほとんど平縁で“稀に局部的に刻み又は小突起を附して小波状を呈せしめ”る。“縄紋は極めてよく発達し極端に複雑なる変化を示し”、貝殻紋も存在するが余り多くない。文様は、口辺部の網代状沈線帯、同部分に“隆起線を鋸歯状に施したもの”などがあるという。また“頸部に一種の波状線” (コンパス文) が巡るものもある。口縁部文様を持つ A 類の説明がさらに詳しく、“網代状沈線紋

又は隆起線、三本一組の平行沈線及び半截竹管を以ってせる沈線より成立し、鋸齒状を為すもの、X字状に交叉し或はこの交叉部に沈円を書いたもの等があり、線紋上には各部に円点が附され、又線紋上或はその両側には各種の点、又は線刻が施されて居る。縄紋は口頸部以下に羽状又は菱形状等に押捺され、その種類としては細い二條ごとに太い一條を交へたもの、蕨手状を為すもの等の如き種々の変形縄紋が認められる”とした。B類は縄紋のみの深鉢、C類は注口付で稀、D類はカリパー状で全面に網目状撚糸紋（現分類では黒浜式新段階）。文様の描法として隆起線、交叉部装飾として円形押圧の存在も指摘していることに注意したい。Fig.5として示されたわずか12片の破片は、この群の多様性を示すように巧みに選択され、一本書きの平行沈線、櫛歯状施紋具によるコンパス文や組紐紋もある（図1）。

そして土器分類の章の註として“第二群は花積下層式、第三群は蓮田式、第四群は黒浜式…と命名されて居る”ことを記した。

甲野の「蓮田式」は、当初の命名範囲を三分したうちの一つである。大山に配慮して名称を残しつつ、その細別としての表現（蓮田～式）ではなくそれぞれ固有名称を付けた。遺跡による違いであることを明示しつつ、それは史前研の研究成果であることも表現して大山の理解を求めたとみる。

花積下層式については、菊名宮谷貝塚の調査成果（史前研が1931年11～12月と32年4月に大規模に調査）が、その内容及び編年的位置付けに重要だったろう。

7. ★■山内史前研メモ

最近公表された（会津八一記念館 2021）、山内清男による史前学研究所早・前期土器観察メモは、興味深くかつ悩ましい内容である。メモの大部分は、ローマ数字で表現された番号と、遺跡名（または所在地）、型式名の組合せの羅列であり、いくつかの遺跡では具体的な土器の

特徴がメモされている（史料1）。番号については、史前研の調査の順番（大山ほか1933）と前後関係が整合し、かつ、遺跡数より番号が少ないことから、調査順の収納単位と推量する。

型式名として「カヤマ式」「蓮田2」「蓮田3」、「モロイソ」が用いられている。注目すべきは、関山貝塚が「蓮田2」であり、多くの黒浜期の貝塚が「蓮田3」とされていることである。つまり、甲野と同様の3分案を、蓮田1～3と表現していることになる。甲野が用いた型式名は山内と協議しながら定めたとされるから、メモを取ったのは、甲野論文が執筆されるより前である。では、いつ観察したのか？

山内による大山史前学研究所資料観察時期として、周知されているのは1928年8月、1929年夏、同12月～翌1月である

メモにある遺跡名で最新の調査は南貝塚（[箱番号?]無し）で1928年9月22日調査。同年7月に調査された掛貝塚が[XXXIX](39)であり、遺跡名のない[LVII](57)が最大の箱番号?である。メモ裏面にも書き込みがあり、複数枚あった可能性も高いので、下限は探れない。

28年8月でないことは確かで、また、1929年末～30年正月の観察の際、メモのような3分案が確立しているならば、「斜行縄紋」論文で室浜を大木1より前としたはずである。

「斜行縄紋」論文執筆までに、各遺跡にどのような縄紋が有るかを観察したことがあるはずで、その後、比較吟味により、3分類と順序に成案を得て、それを確かめるために、1930年夏以降1933年春以前に再観察したと推量する。

当該メモでは、土器の具体的な装飾として、貝殻紋についての記述が目立つ。また、坂堂貝塚については型式名を記さず、貝殻紋や縄紋の特徴（無節、異節、ループ、結束）をメモしている。甲野1935で“出土品の大部分”が花積下層式とされる遺跡である。観察後の検討により、大部分が花積下層式で一部が関山式と判断し、甲野と共有したのだろう。

8. ★■山内の寸言

山内 1932 では“纖維混入著名な、しかし、條痕のない数型式があり（総称蓮田式）”（p89）と、蓮田式が数型式に分かれることを表現した（1939 年の補注付新版も同じだが、1967 年論文集再録では「新形式」と誤植されている）。

山内 1935 では、“蓮田式は約五型式に區別されて居る”とある。おそらく五は三の誤植だろう。“約”の一字を付ける理由は、甲野論文が公表されていないことと関連すると思われる（→日本先史土器図譜の関山式）。

ドルメン編集部 1935 の「東日本に於ける縄紋式土器型式一覧表」（宮崎紘が原著者たちに確認しながらまとめたという）では、陸前の編年が「斜行縄紋」を出典としつつ、室浜→大木 1 の順に変わっており、山内の指示であろう。甲野 1935 の編年も“未定稿”と註を付けて紹介されている（両者の発行日が 5 月 25 日と 6 月 1 日でほぼ同じなことは意味があるかもしれない）。

山内 1936 の附表として謄写版刷りで配付された、初の広域編年表で、蓮田式が花積下、関山、黒浜の 3 型式に分かれ、それぞれ室浜、大木 1、大木 2a, b に並行することが示された。同様な表は山内 1937 にも付属する。両表には微妙な違いがあるが、陸前／関東の前期は違いが無い。

山内は 1937 年 5 月に上福岡貝塚を調査した。貝塚を伴う住居跡が複数調査され、時期は関山期と黒浜期であった（細田他 1992）。黒浜～諸磯期の境田貝塚を調査中の江坂輝弥と、菊名貝塚を精力的に調査している桑山龍進が手伝った。山内に学ぶ若者たちのうち、前期土器に取り組んでいる者を選んだのだろう。

9. ■先史土器図譜の関山式

1939 年 7 月に刊行が始まった『日本先史土器図譜』は、翌月、第二輯を刊行し、前期の土器を解説した（山内 1939）。前期前半は関山式のみである。花積下層式は自身の調査経験が無

いこと、黒浜式は内容が多様で整理しきれていないことが原因と思われる。10 図版のうち、半分が関山式であるが、11 番の資料は正面と側面とで 2 図版を使ったため、図示した土器は 4 点である（図 2）。解説文（原本未見のため、新版[山内 1967]による）は、“前期縄紋式土器の一型式である”と書き出し“関山貝塚の土器を標準として名付けられて居る。はじめこの式を指摘されたのは甲野勇氏である”とした。図譜において“指摘”の語は文献での記載に限らないから、具体的なまとまりに基づき広義蓮田式の一部が独自型式だと指摘したのは、甲野が先なのだろう。花積下層式と黒浜式も、史前研調査遺跡が標準であり、甲野が「指摘」した可能性が高い。

さて、山内は、甲野が現・関山式を蓮田式と呼ぶのに対し、広義の蓮田式との混同を避けるため「関山式」の名を用いているとした。これが普及し、甲野も 1947 年以降は関山式と呼ぶ。

形態についての記述は甲野と表現は異なるが大差ない。

装飾については、図版解説も含めて甲野と比較するが、その前に図版の選定を検討する。

わずか 4 点で、11 は山内が帝室博物館に寄託した上福岡貝塚の片口付深鉢。12～14 は史前研の資料で、栗崎貝塚の注口付深鉢と、関山貝塚の深鉢 2 点。稀である片口・注口付が 2 点選ばれているが、これは山内が類似した例を複数示す方針だったため（この方針は次輯「加曾利 B 式」でより明瞭になる[早坂 印刷中]）。

地紋は“体部には縄紋があるのが普通で、無紋のことは極めて少ない”とする。甲野と異なり貝殻紋の存在を述べない。“縄紋は帯状に何段にも加えられ … 羽状縄紋を作ることが多い。一般に縄紋の種類に富み、そのうちの或者はこの式に特有である”とする。写真 11 の解説で“上部から中部にはこの式に普通な羽状縄紋があり、下部及び底面には組紐を捺して付けた別種の縄紋”とする。普通とした縄紋は、複列のループ紋と斜縄紋（帯内異方向）が交互に

施されるものである。これが「普通」なのである。12は“特有の帯縄文が認められる”とする。写真観察では、RLとLRの合撚で、右撚りにしたものと左撚りにしたものと二種を交互に配置した、菱状構成の縄紋である。合撚が関山式特有の縄紋と扱われている。全面が短足ループ紋（段間異方向）で覆われる。13は“体部に带状縄紋”とそっけない。14は“羽状をなして居ないが、同一縄紋原体を何段にも圧してある。下部及び底面には別種の縄紋”とする。体部上～中部は末端ループのLRを短足気味ないし長足に施紋している。下部は、原体の特定は困難だがある種の結節を回転している。

ループ紋を関山式に普通に施されるもの、合撚を特有の縄紋と扱い、組紐紋の存在にも触れている。甲野の記述とよく対応する⁽⁸⁾。

文様については“主に口頸部に加えられ、半截した竹管を引いて作ったものが大部分で、其の中に円い瘤状の突起を配したものが往々ある”とした。「主に」なので、口頸部以外に文様を加えるものも有ることを暗に示している。半截竹管以外の描法に具体的に触れない。貼瘤には言及するが、円形沈文の存在は記さない。甲野が述べた「波状線」も、11に用いられているのに触れていない。自らの調査資料が上福岡貝塚に限定されることから、記述の重心が現・関山Ⅱ式に偏っていることは確かである。

文様図形については、11を“整正で、よく同形が繰り返されている”とする。13は“斜線を組合わせた文様”とし、甲野が文章のみで示した“網代状沈線文”の具体例を補った形である。甲野・山内は、花積下層式と関山式の連続性を示す一つの根拠と考えただろう⁽⁹⁾。

山内は解説本文の最後に分布を述べる。“大体関東地方一般に分布して居るが多少の地方差を持つらしい”とする。同じ輯の諸磯式の解説にある“北関東地方には於ては多少の地方差を持って居り、新形式の設定を要する如くに見える”と近似の表現である。諸磯式解説については現・浮島式を指すとの見解が定着している。

一方、関山式にそれほどの地域差は知られていない。関山Ⅱ式には、組紐文が盛行しない地域や、コンパス文の代わりに縦条線が用いられる地域が知られているが、図譜当時にそのような微細な地域差を知っていたかは疑問である。関山貝塚と上福岡貝塚の違いを地域差と見た可能性も有る。一方では、東北地方で大木Ⅰ式の前に船入島の土器が入るとの見解も示していたから（後述）、関山式内の時期差と考えていたかも知れない。今後の解明をまちたい。

(8) 没後の刊行だが、前期に関する記述は戦前に原型が出来ていたと見られる『日本先史土器の縄紋』(山内 1979)に、関山式への言及が多い。特に次の記述が山内にとつての関山式の範囲の参考となり、注意したい。

“末端に環 (Loop) の付いた縄 … 関東の関山式では環付末端は最も盛行し … 時には端の環の部分だけ (1指幅) 数帯、しかも R_{L}^L と L_{R}^R とを交互に押捺することが屢々である … 関山式の前に位する花積下層式には … ない。” (p18-19) “関山式の結節回転 … 2本の縄を以って緩い結節を作ったもので、背面の2条が斜行し、腹面に条が抱合して居る。 … この種の結節回転は関東地方では他の型式には例がない。関山式に限るらしい” (p21)

(9) 現在の知見では、関山式と同種文様は関山Ⅰ式新段階が盛行期で、成立過程は別の説明が可能になっている。

4) 細分模索期 (1939 ~ 70)

1. 概要

山内等に感化された若い世代が各地の貝塚を調査した。単に編年を追認するにとどまらず、新たな型式や細分を模索していった。

2. ★清水坂土器

少し遡るが、鈴木尚 1934 は、清水坂貝塚から、茅山式と少し異なる条痕文土器と、蓮田式に類似する縄紋土器などが伴って出土したと報告し、両者の中間的な“形式”かと考えた。現在の視点では、打越2式と花積下層式後半の土器であり、仮に混合して出土したとすれば、斜面貝塚であるから、崩落による混合だろう。しかし、当時はそれを判断する根拠がなかった。

3. ★菊名貝塚

桑山は菊名 (上ノ宮・宮谷) 貝塚を引き続き調査していたが、江坂も菊名宮谷貝塚の一地点

を調査し、層位的所見を明らかにした（江坂 1939）。貝層上部で花積下層式（羽状縄紋系と貝殻紋[背圧痕]）、貝層下部で茅山式と異なる條痕系土器に若干の花積下層式を伴い、さらに貝層全体を通じてそれらに数倍する無紋土器片が出土したという。貝層下で田戸式類似土器（貝殻条痕による波線）と子母口式類似土器（内屈口縁に絡条体圧痕、体部に小刻みな横転撚糸紋）が出土したとし、各 1 点図示した。前者は断面図が無いが、薄手であれば天神山式かもしれない。後者は類例が思い浮かばない。

4. ■幸田と打越

1941 年 4 月、矢島清作が前年に幸田^{こうで}貝塚で調査した竪穴住居跡を報告した。貝層以下から花積下層式のみ、貝層上からは関山式も出土したという。両者の層位的上下が始めて確認された。26 片の土器を図示し、うち 7 点が関山式、ほかは花積下層式とした。関山式は現・関山 I 式前半に多い口縁部文様を持つものと、結節、附加条、ループ紋を施す胴部破片。花積下層式は現・花積下層式後半の土器。土器の考察は江坂の助言を受けたとある。

同年 10 月、酒詰^{さかづめ}仲男・和島^{わじま}誠一が、1939 年に調査した打越^{おっこし}貝塚を報告した。酒詰は出土土器を関山式とした。現在の視点では、関山 II 式古段階を主とし、関山 I 式の破片が混じっている。後に、東西の関山期大集落跡として並び称される両遺跡が、同年に初の住居跡報告がされたのも奇しき因縁であろう。

5. ■打越遺跡の発見者

なお、山崎緑水（重兵衛）1935 で、現・打越遺跡の位置に「水谷貝塚」が示されている。山崎 1939 によると、山室貝塚（現・宮脇遺跡）を 1927 年、水谷（山崎）貝塚を 1928 年に発掘し、両者とも“突起紋様土器”が出たとある。山崎 1935 には両貝塚から出土したという、貼瘤が明瞭な関山式の口縁部破片が図示されている。ちなみに、幸田貝塚を史前研が初めて発掘した

のは 1930 年である。

6. ★江坂輝弥の二系統論

縄紋文化起源に関する二系統論の流れについては早坂 2020 で整理した。その主要人物の一人が江坂輝弥である。江坂が多系統を論じたのは、江坂 1938 が最初であり、ここでは、田戸→子母口→茅山→花積下層という山内編年に対して、田戸式と茅山式のあるもの（現・野島式だろう）が類似し、花積下層式に伴う條痕系土器（條痕系の誤植だろう）は子母口式に類似することを悩んでいる。

撚糸紋系文化発見後の江坂 1942 は、撚糸紋系の最後に石神井式（井草式）を置き（当時は、単純な構成の稻荷台式から複雑な構成に発達すると考えられていた）、「赤塚式」を挟んで菊名式（花積下層）に続く系統と、田戸・茅山系が併存し、赤塚式には田戸上層式を伴うとした。

7. ★「赤塚式」とは？

「赤塚式」の語は白崎 1941 が初出であり、“本式[稻荷台式]と関連ある最近発見の未発表新形式の栗原式・石神井式・赤塚式等”と列記されたが、白崎も江坂も、具体的に解説しないままとなった。

矢島 1942 は「石神井式」は、井草式とそれに伴うと白崎が考えた条痕文土器からなるとした。撚糸紋系としての石神井式は井草式と同じ土器が中核概念である。赤塚式はそれと花積下層式をつなぐものと江坂は位置づけた。

酒詰治男編 2011 で公表された、酒詰仲男の日記に興味深い記述がある。

“赤塚式は田戸の上層である。之は表面採集。栗林といふのは一片位。資料不充分。石神井式と云ふのは口唇部肥厚し、縄文をころがしておいたもの。一方傾斜。花輪台式も之と同じ縄文だが羽状になる。稻荷台式は棒により糸をまいて無理に上から下へ引っぱったものである（以上山内さんの話）”(p4 1947/1/15)

「栗林」は栗原の言い違いまたは誤記だろう。

赤塚式が田戸上層だというのが興味深い。白崎・江坂の位置付けは、撚糸紋系だが、山内の所見では同遺跡の主体は田戸上層なのである。

以上の断片的な情報に合致する資料がある。昭和初期まで赤塚村に属していた成増一丁目遺跡（鈴木他 1981）で下吉井期の遺構が発見されている。繊維が乏しく、半割管による沈線や低い隆帯で文様を描く土器に、含繊維で、口縁に幅狭な撚糸側面圧痕を施し、体部は原体を斜位回転して条が縦を向く縄紋の土器が伴っている。前者は下吉井式だが、かつてであれば田戸上層式と判定されておかしくない。後者の独特な縄紋施文法や文様構成は井草式と共通点があり、かつ花積下層式に近いことは明白である。当該資料の調査は、赤塚式の設定より 30 数年のちのことだが、白崎等が同様の資料を（同遺跡でなくとも）表面採集していたとすれば、腑に落ちる。そうであれば、「赤塚式」は広義の花積下層式に含めうる可能性が生じる。とはいえ、江坂 1943 では赤塚式を早期後半の型式とし「横浜市港北区末吉梶山口には赤塚式の貝塚」とした（港北区は鶴見区の誤り）。

8. ■江坂の関山式細分案

第二次大戦を挟み、戦後に神話教育の反動としての「考古学ブーム」が訪れた。雑誌「歴史評論」でも考古学入門講座の連載が企画され、江坂輝弥による「講座 縄文式文化について」が始まった。編集側の意図に反し、江坂は自らが進める早・前期研究の最先端の紹介に励み、長期の連載となり、中期前半までで中断した。第 7 回（江坂 1951.05）で花積下層式、第 8 回（江坂 1951.08）で関山式を解説した。

関山式については、“前半”・“後半”の区分があるとし（初出では“前年”“後年”だが、5(6)正誤表で訂正した）、また第 7 回で矢島 1941 の関山式は“古形式”だとした。新形式ないし後半の具体例は指摘しなかったが、調査に参加した上福岡貝塚をそう扱った可能性が高い。

9. ★江坂の花積下層式細分案

花積下層式については、梶山式→菊名式→下組式→大串式という 4 分案を提示した。

条痕文・無文・貝殻背圧痕文の比率により、それが殆んど、多い、少ない、無い、という区分である。1954 年にも 梶山・菊名下層 → 清水坂・菊名 → 下組 → 坂堂・幸田・野中・大串・花積下層 という遺跡の配列案を示した。1959 年には 清水坂→菊名Ⅰ→菊名Ⅱ→下組→野中 と、清水坂を最古とした 5 分案になった。

すでに多くの指摘があるとおりに、横浜（梶山・菊名・下組）と茨城（野中・大串[酒誌他 1949]）では貝殻系施紋の比率に地域差があり、時間的前後の基準とするには無理がある。各「形式」の文様（図形）がどう違うかの説明を欠いており、型式編年とはいいいがたい。図示資料を見れば、「清水坂」は現・打越 2 式を含み（江坂 1959 では清水坂式の例として千葉県稲原貝塚例を図示しており、打越 2 ～下吉井式を含む）、「菊名下層」（類例として図示された木島遺跡例を含む）は神之木台～下吉井式と、花積下層式に伴う無紋・隆帯文土器を合わせた内容で、「菊名」（上層）と「下組」は花積下層式の新しい部分である（野中・大串も近い段階）。西関東の遺跡の編年として、前後の逆転はない。

「梶山」には羽状縄紋系の存在を述べておらず、そのような段階を花積下層式に含めたことが根本的な問題のようにも見える。江坂 1943 の時点で、梶山貝塚の資料は、主体となる土器（無紋・擦痕・隆帯）の共通性から赤塚式に含めていたようであり、それを梶山式に改称した。江坂 1939 で菊名貝塚下部貝層に若干の羽状縄紋土器の出土を述べており、江坂 1951.05 ではわざわざ記述しなかっただけだろう。

10. ★下組の隆帯文土器

江坂自身の記述には登場しないが、1949 年 5 月に下組(南)貝塚を慶応大学が調査し、興味深い成果を得ていた。清水 1954 によると、花積下層期の貝層西端の下に竪穴を検出し、その床

面に、復原できる土器が 1.2m 離れた 2 群となって密着破碎していたほか少量の花積下層式土器片が出土した。復原土器は、口縁に沿って隆帯を巡らせる。清水は“関東地方には類が少なく、伊豆方面に近似したものを見る様である”とした。「伊豆方面」の例は定かでない（戦前の江藤ほかの報告にさして近似する例はない）。

西村他 1954 には“江坂氏は発掘を試みられ、その貝層中に花積下層式土器を検出し、更にもその下の黒土層下に住居址床及び炉址と思われるものを発見 … 床面に於いて田戸上層式に近似の尖底土器”とある。同じ資料であろう。

復原土器は、1983 年に神奈川シンポ(後述)で図化されており、現・神之木台式の典型例である。岡本勇の講演で“慶応大学の人たちが、敗戦後間もないころ横浜市港北区の下組貝塚を調査されましたが … 貝層からは花積下層式が出て … 貝層直下に小さな竪穴があって、その中から出た土器が神之木台式の土器と瓜二つのもの”(神奈川考古 18 号 p5)と評価された。

その土器を西村は田戸上層式近似と表現した。「赤塚式」への山内の評価と重なる。

いわゆる「茅山上層式以降」の土器群のうち、下沼部式が絡条体圧痕を特徴とし、絡条体圧痕と類似する貝殻列短線が特徴的な打越 1 式が子母口貝塚から出土する。これらは子母口式と紛らわしい。打越 2 式は清水坂貝塚で典型的な花積下層式と共出した。神之木台式と下吉井式は隆帯や割管沈線・押引線が田戸上層式と類似し、繊維が少なく外面が擦痕で条痕も用いる点が子母口式と類似する。これらの諸点により、独立した型式としての認知が遅れ、編年の混乱を招いた。

11. ■二ツ木の土器

終戦直後、市川にグロート神父が「日本考古学研究所」を設け、一時は考古学界に大きな役割を果たした。研究所が 1950 年に調査した千葉県二ツ木貝塚の概要が 55 年に公になった(篠遠 1955)。二ツ木第二貝塚出土土器の主体を占

める前期前半土器のうち、撚糸側面圧痕があるものは花積下層式とし、その他の“関山式類似土器”は、山内 1939 の記述と比較して、異条縄紋や片口付土器がないことなどから、“花積下層式と関山式との間に、その中間型式として、本貝塚から出土したとき一群(可能ならば二ツ木式)が介在するのではないかと考え”た。なお、第一貝塚の記述では“関山式が平箱約 1 杯分発見された。関山式の土器は二ツ木第二貝塚の項で報告した特殊な形態を有するものである”とした。文意がとりにくい。器形は第二貝塚に類似するが文様は関山式ということなのだろうか。

江坂ほか 1959 では、大木 1 式並行に窮屈に「二ツ木」と「関山」が並べられた。大木 2a 並行の「(文蔵)」が括弧付なのと扱いが異なる。当時最新の縄文文化の概説であり、確立された型式と受け止める読者も多かっただろう。

12. ■藤岡、飛鳥山、殿山

1960 年、入間郡富士見村(現・富士見市)が中学校建設を予定している「殿山」で、貝塚が発見された。栗原文蔵等により緊急調査された。関山期と黒浜期の貝塚があった。翌年、整理を行っていた旧鶴瀬中学校が火災にあい、報告書刊行は先送りになった。

1961 年、吉田格が北区飛鳥山遺跡を報告した。59 年暮れに調査した地点である。“関山式土器は二形式に分類されるが、関山式土器でも瘤がつけられる時期があるが本竪穴では無く、半截竹管の平行沈線による文様と縄文、撚糸文のみである”“出土した関山式土器は、黒浜式土器に近い型式”とした。拓影には組紐紋が少なくないが、吉田は組紐紋に一切言及せず、その他の縄紋原体の説明もあやふやだった。

1962 年、岡本勇と塚田光が栃木県藤岡貝塚を報告した(発掘は 1951 年)。編年は論じなかったが、半截竹管による沈線と疣状貼付を口縁部文様帯の主要な要素とする土器群が報告され、以後、関山式の定点となった。

1965年、小林達雄等が庄和町米島貝塚を報告した。住居形態の変遷を論ずる項で、“殿山遺跡が栗原文蔵氏等によって調査され、藤岡出土の関山式土器と区別される一群の土器を確認した。これには藤岡で顕著な疣状貼付紋が含まれず、関山式の新しい部分なのである”(p16)とした。小林は栗原と同窓の後輩であり、殿山遺跡3号住出土土器の特徴を共有していた。

殿山遺跡報告は、1977年に出版された。栗原のまとめによれば、3号住居跡は“所謂組紐文の土器が目立っている。この種の土器について、当時類例に乏しかったが、幸田の貝塚には見られないものであり(矢島1941)上福岡出土の片口土器(重要文化財指定)には、胴部下半に組紐文があることなどから、関山式の新しい部分と考えられるに至った(この前後の資料について、故山内清男博士にいろいろご教示、ご指導いただいたことを銘記する)”とある。山内の教示は1960～61年と推測できる(栗原ほか1962に諸磯式について山内から教示を受けた旨の記述がある)。

13. ■茨城の関山式

1967年、井上義安・宮本栄一が勝田市(現・ひたちなか市)大平遺跡の関山式土器を報告した。そして茨城県北部の同時期の遺跡には、疣状貼付が少なく、口縁に縦の沈線を施すものが多いとし、地域性を指摘した。一方で、“疣状貼付を伴う土器は、撚糸圧痕を併用した二ツ木式併行土器…しばしば共存”と、時間差という見方も示した。

14. ★1960年代の花積下層式

日本大学考古学研究会は、1960～63年に横浜市白幡西貝塚の調査成果を3回に分けて報告した。調査は岡本勇が指導したという。無文・条痕文・無文地突帯文・平行沈線文様の土器が主体で、撚糸側面圧痕・羽状縄紋の土器が少量伴う。その位置付けは考察されなかった。

坂詰秀一 1963、村田文夫 1965、渡辺誠・村

田 1966も川崎・横浜地域の花積下層式を報告し、江坂編年を基準に各資料を位置付けた。

1967年、神奈川県立博物館が、梶山遺跡東南斜面の小貝塚群を調査し、69年に報告した。出土した花積下層式は、地点層位による差が無いといい、条痕文・無文・擦痕・貝殻背圧痕が主となるが、撚糸側面圧痕・羽状縄紋の土器も2割程度あった。執筆者の神沢勇一は、“花積下層式のなかでも新しい部分に属する”と評価した。神沢がどのような土器を古い部分と考えていたかは不明だが、報告資料の位置付けは現在でも適切と見られる。江坂1950の時点では梶山貝塚は未発掘で、桑山の(採集資料による)所見のみで時期を設定していたが、羽状縄紋系の比率のみで梶山を最古とした可能性がある。

村田は、1966年に花積下層式の研究状況を整理した(掲載誌奥付では3月刊行だが、渡辺・村田1966を引用することと村田自記の日付から、10月以降に出版)。清水坂・菊名下層・梶山に加えて白幡西を古い一群とし、下組、菊名上層、新作C・Dを新しい一群とした。前者はバラエティーに富み、後者は斉一的とした。早期後葉から前期初頭への移行について、江坂編年(二系統並行論)と岡本編年は大きな違いがあるが、新作D貝塚では江坂説に有利な所見を得たとした。

15. ★下吉井式と平方式の仮設

1970年、横須賀市下吉井遺跡が報告された。1967～68年に赤星を代表者として発掘され、報告者は岡本だった。貝塚ではないが、斜面堆積の包含層である。隆帯文の土器(現・神之木台式を含む)と割管対線で波状文などを描く土器が主体で、「下吉井式」と仮称した。約6千片のうち同一個体の3片のみ縄文と撚糸圧痕を施しており、岡本はこれを“花積下層式に相当する”と位置づけた。ほかに東海地方の塩屋遺跡上層に対比される土器も伴っていた。

そのころ、埼玉の谷井彪も同種の土器の位置付けを探っていた(谷井1971)。茅山上層式以

降花積下層式以前に位置づけられる資料を整理し、白幡西遺跡の平行沈線文土器を下吉井式だと指摘した。同じ号で、榎本金之丞が平方貝塚の資料を報告した。貝層の出土土器は多様で、条痕文、山形貝殻文、隆線で区画された山形の捺糸側面圧痕、羽状縄文、天神山式などがあり、前4者を同時期として「平方式」を仮称した。

5) 段階設定期 (1971～86)

1. 概要

高度経済成長に伴う交通網の整備及び東京近郊の宅地化と、それに対する埋蔵文化財保護体制の整備に伴い、行政発掘が激増する。県や市町村による調査報告で各型式の細別、さらに段階が設定されていく。

2. ★花積貝塚の報告

1970年付けで、花積貝塚の緊急調査の報告が出された(谷井1971.7などを引用するので実際の刊行はそれ以降)。7号住居跡は花積下層期だった。報告者の下村克彦は詳細な分類を行った。条痕文、捺痕文・無文、貝殻背圧痕文が主体で、縄文・捺糸側面圧痕は2割程度だった。しかも縄文がある土器の半ばには内面に条痕や縄文が有った。下村は、江坂編年や村田案に肯定的であり、7号住を“清水坂貝塚、白幡西貝塚、内畑遺跡に類するものとして花積下層式土器の最古型式と考え”た。梶山遺跡にも羽状縄文があることを肯定的に評価し“縄文系土器は現行細分の当初から存在すると私考”した。

3. ■関山式二分案の具体化

1970～78年に、区画整理事業に伴う、幸田貝塚の連続的調査が実施された。その最初の概報(岩崎1971)で、岩崎卓也は、7号住居跡と6号住居跡を比較し、関山式を新旧に分けた。沈線間の刻み目や突起(貼瘤を指すようだ)の有無、コンパス文の施紋具と形態、地紋の差異(6号は組紐文が顕著で異条縄文も多くなっている)、片口付が無しか支配的かと、多面的に比

較した。前者は二ツ木遺跡に近く相対的に古式、後者は黒浜式に接近した土器と“予測”した。なお、2年後の概報で調査団長の八幡が三細分したとされることがあるが、土器は二細分で、住居跡との関係で過渡期を設けたに過ぎない。

翌1972年、駒形敏郎が吉田格の資料を用いながら関山式土器を考察した。飛鳥山遺跡の資料と、吉田が1939年に調査した幸田貝塚の資料とを比較した。岩崎の指摘と重なる以外では、幸田にヘラ状工具による沈線や、結び目(結節)、複列でないループ文があり、飛鳥山では口縁部文様帯にも地文があり、多くの沈線を平行させてモチーフを描くことなどである。さらに二ツ木式を肯定し、ヘラ状工具で文様を描くことが特徴で、蕨手状捺糸圧痕が残存すること、波状口縁の頂部が凹むことを幸田例との違いとした。飛鳥山例は、米島報告における黒浜式の古い部分と比較し、異条斜縄文、コンパス文、ひし形羽状縄文等が類似するとした。“所謂羽状縄文土器群は、花積下層式・二ツ木式・関山I式・関山II式・黒浜式と編年される”とまとめた。この論説は、立正大で吉田に提出したレポートで、栗原や小林などからも教示を受けた。

なお、打越遺跡でも1972年から、区画整理事業に伴う調査が始まった。

4. ■関山報告と四分案

1974年、緊急発掘による関山貝塚1号住居跡の報告がなされた。庄野靖寿が詳細な観察・分類を行った。1号住居跡は関山I式とした。

花積下層式と関山I式を分類する上でいくつかの観点を指摘した上で、“二ツ木式を設定するとすれば、二ツ木貝塚でなされた(a)、(c)に関山I式、花積下層式の一部を加えたもの”と、二ツ木式に前向きな姿勢を示した。なお、二ツ木(a)は捺糸側面圧痕+貼瘤、(c)は刻み目ある隆線+貼瘤を特徴とする。(a)を二ツ木式に含めるのは駒形と同じだが、刻み隆線を挙げる一方、“ヘラ状工具”による文様の扱いは明らかでない。関山1号住にもあるからだろうか。

“関山Ⅰ式土器も多少複雑”であり、貝崎貝塚（昭和48年調査地点とするが47年の誤り）および後山遺跡は新しい傾向があり、細分される可能性があるとした。また、関山Ⅱ式についても、琵琶島貝塚では、第1～3貝塚で組紐が少なく、第6貝塚では組紐が大部分でほとんど文様帯を持たないことから、細分の可能性を指摘した。「ニツ木」を含まない関山式を四分したことになる。

なお、琵琶島第6貝塚は未報告である。速報（安岡・庄野1973）では新屋敷貝塚と呼ばれ、新屋敷貝塚を“関山新期（琵琶島）”、貝崎貝塚を“関山古期（藤岡）”と表現している。

貝崎47年地点はのちにBブロック第3地区（B-1住）となり黒坂が1984年に報告した。

庄野が関山Ⅰ住より新しい関山Ⅰ式とした資料は、現在、貝崎B-1住が貝崎3段階新（関山Ⅰ式中頃）、後山遺跡はⅠ住が関山Ⅰ式新段階、2、4住が関山Ⅱ式前半に位置づけられている。

5. ★新田野と遠下の報告

1975年、立教大学考古学研究会が調査した千葉県新田野貝塚が報告された。土器は武井則道が記載した。出土土器は花積下層式が主体であった。考察はなされなかったが、撚糸側面圧痕文様が多段化しない、特徴的なまとまりがあった。指導者に岡本を含み、調査に参加したOBとして、高橋雄三、吉田哲夫の名がある。

同年、石岡憲雄が日立市遠下遺跡の縄文土器を報告した（発行日付は3月だが新田野報告を参考文献にあげている）。第5群とした土器は、口唇部上端や内面に縄紋を施し、太い隆帯もしくは中広い微隆起帯で区画した口縁下5cm位の狭い文様帯に、斜縄紋・縄側面圧痕・爪形状縄押圧・円形刺突などを施す。石岡は早期終末ないし前期初頭と位置づけた。

6. ★神之木台式と打越式の設定

1977年、高橋と吉田が横浜市神之木台遺跡出土の縄文土器を紹介し、特徴的な隆帯文の土

器を「神之木台式」と設定した。この資料は下吉井遺跡の報告でも言及されていた。高橋は考察で、いわゆる花積下層式から「菊名下層式」を分離すべきと説いた。

1978年、荒井幹夫等が打越遺跡の6か年分の報告をまとめた。清水坂や平方で出ていた鋸歯状貝殻文が特徴の土器が、住居跡に伴う土器群として確認され、「打越式」と命名された。神之木台式も1軒、下吉井式、花積下層式、関山式もそれぞれ多数の住居跡が調査された。したがって、複数型式の破片が混合する傾向があるものの、打越式には羽状縄紋が伴うが撚糸側面圧痕が伴わないこと、下吉井式には条が縦位になる縄文が伴うことが指摘された。

下吉井、神之木台、打越式の設定により、江坂が花積下層式に属するとした非縄紋系土器のうち、貝殻背圧痕・無紋・一條隆帯をのぞく多くが、花積下層式以前の独立型式となった。

7. ■組紐の記載方法

1978年に貝崎貝塚第3次調査が報告された。土器の記載は下村克彦が担当し、まとめは庄野が執筆した。この報告で重要なことは、組紐原体の記載方法が提案されたことであり、以後、普及した。“危険を顧みずいえば関山Ⅰb式”と、細々分の表記案も示した。なお、この表記法による四分案は75年に開催されたシンポジウムで公表されたという（下村1981）。

8. ■青木の関山式

1979年春、青木秀雄が2つの文献で関山式を検討した。比較すると、執筆順と発行順は逆転するようである。

風早遺跡出土土器は“所謂関山Ⅰb式”に位置付けた。“花積下層式と関山式の差は基本的には「の」の字状の撚糸圧痕と竹管による蕨手文の違いにある”とした。また“花積段階にあって口縁部および胴部において主体をなしていた縄文は…（関山Ⅰ式期に）胴部に於て縄文が多様化される”と把握した。ニツ木式は“過

渡的段階であることは明らか”と消極的な評価だった。また、“結節・結束・ループおよび正反の合等 … 縄文の一単位の中でも意識的に羽状的形態を作出しようとしている … この事は、Ⅱ式のそれが組紐圧痕の様な縄文形態をとる事でも明らか”と、関山式に特徴的な原体は、原体単体に異方向を内在することも指摘した。

高輪寺遺跡^{こうりんじ}では、関山Ⅰ式の古い段階が主として出土し、青木は、花積下層式から関山式への変化と分類基準を検討した。新田野貝塚や打越遺跡にある“細い隆帯+撚糸圧痕”と、二ツ木貝塚の“細い隆帯+撚糸圧痕+瘤状貼付文”を二ツ木式とし、撚糸圧痕に替えて梯子状の沈線になったものを関山Ⅰ式とした。篠遠の定義とは大きく異なる「二ツ木式」である。

9. ★鈴木の花積下層式

1980年、鈴木敏昭は足利遺跡を報告した。江坂等の、施紋手法の構成比による編年に痛烈な批判を行い、東海地方と東北地方からの影響を比較しながら花積下層式直前期の様相を論じた。“花積下層式出現前夜”は、下吉井遺跡と“花積下層式に直結する内容を濃厚に保持している”遠下遺跡第5群土器を両極とし、“相模と常総では全く異なった土器群がお互いに無干渉状態で、それぞれの地域性に根ざしたあり方を示しながら対峙していた”と捉えた。同時期の大宮台地から武蔵野台地の代表例として花積貝塚7号住を採りあげ、貝殻背圧痕文に注目し、縄文施文の受け入れ時に、それをモデルとして出現したと評価した。

これらは“一応前期の最古に位置付けておきたい … 花積下層式の中に含めて考えても良いのではなかろうかとも考えているが … 今後の課題”と、判断を保留した。

10. ★『菊名貝塚の研究』

1980年、桑山龍進が、考古学研究者となった子息正進の助けを得て、戦前に調査した菊名貝塚の報告をまとめた。膨大な資料が学界に共

有されることとなった。縄文類・貝文(背圧痕)類は上層から、凸隆帯文類、波状文類は下層から出土し、條痕文類、無文類は上下で出るが下層により多いと、層位所見を述べ、下層から出る一群を“菊名式”と呼ぶことを提唱した。「菊名式」の語は、花積下層式の別名として戦前に提案された経緯があり、また、江坂は、1951、1954では上層出土土器を「菊名」とし、1959では下層を菊名Ⅰ、上層を菊名Ⅱと呼んだ。桑山の“菊名式”はこれらと異なり、設定されたばかりの神之木台・下吉井式に近かった。

11. ■大古里と井沼方の関山Ⅱ式

1981年、黒坂禎二が浦和市大古里遺跡の二つの地点の関山Ⅱ式期の住居跡出土土器を報告した。3月に報告した資料は、庄野の関山Ⅱb式に比定した。8月の報告では、関山貝塚の分析に対応する、詳細な分析を行い、関山Ⅱ式後半の特徴を明らかにした。なお、後山遺跡はⅡa式に位置づけた。さらに組紐製作法に近似した手法による“組縄文”の存在を明らかにした⁽¹⁰⁾。

同じ浦和市内で井沼方遺跡の調査も進んでいた。小倉均は1982年にまとめた報告で、組紐主体の井沼方遺跡出土土器の様相を整理した。

⁽¹⁰⁾ 後年公開された、1953-54年の山内の縄紋講義のノート(鈴木編 2000)によると、山内自身もそのような原体があることを講義で語っていた。

12. ★■新田野段階と二ツ木式再定義

1981年、下村が、花積下層式から関山式への移行過程を検討した。新田野貝塚の花積下層式の大部分は、一段階の基準となると捉え、“新田野段階花積下層式”を提唱した。“花積下層式の最終末に位置し、精製系の土器に関山式へ受け継がれていく文様構成が生まれた”と位置づけた。

さらに、二ツ木貝塚も検討した。文様帯内の描線として撚糸側面圧痕(a類)、ヘラによる平行沈線(b類)、刻みの施された隆起線紋(c類)を確認し、“b類が中心をなす”とした。“二ツ木式はやはり設定しなくてはなるまい”“花積

下層式の要素を残しつつも、関山式土器が確立した段階の土器群と認識される。その意味で関山式の最古型式として認識するのが正しいと思うのだが、二ツ木式土器の名称を踏襲するのが学史に忠実であろう”とした。

関山式の細分名称としなかったのは、すでに“関山Ⅰa式”を命名していたからだろう。そうでなければ、浮島式のように、二ツ木段階を“Ⅰa”とすることも可能だった。現在は、庄野・下村による4細分名は使われないが、不用意に別の意味で用いれば混乱を生むだろう。

13. ★高橋の花積下層式

1981年、高橋雄三が花積下層式について総合的な研究を発表した。「菊名下層式」と、花積下層式の成立の検討が中核となっている。

“菊名下層式土器は、胎土に繊維を含んだ無文土器が主体となる。まったく無文のもの他に、繊維でこすったような擦痕を有するものや、部分的に条痕を残しているものもある。文様を有するものは少ないが、口縁部に一條の隆帯をめぐらすものもある。この場合、隆帯上に指頭などによる凹みがつけられることがある。口縁は波状と平縁とがあるが、平縁が多い。底部は尖底が主であるが、平底もみられる。以上の内容をもつ菊名下層式は、神之木台式・下吉井式と同一の系統(土器群)に属する”(p34) “菊名貝塚で見られたように、花積下層式土器とは層位的に上下関係にあることは確実である。さらに、菊名下層式土器は多くの遺跡で花積下層式土器と共に出土しており、その一部は併行関係にあるのかも知れない”(p35) とした。さらに、桑山1980にコメントし、神之木台～「菊名下層」への文様要素の消長と、桑山の「菊名式」との異同を整理した。

また、花積下層式の諸要素のうち、縄文と撚糸側面圧痕は東北に由来し、隆帯やゼンマイ(蕨手)状文は下吉井式に由来するとした。

14. ■佐々木の関山式

1982年、富士見市遺跡調査会紀要に、縄紋

前期の土器を主題とする2本の論文が掲載された。打越遺跡の調査団の中で土器の考察を分担しており、その成果の一端である(ここで紹介する2本のほか、荒井が打越～下吉井式土器を担当していた)。

佐々木保俊は、近く報告予定の打越遺跡169号住居跡出土土器を紹介した。沈線の施文具がヘラ状・棒状か半截竹管かに注意しながら資料を解説し、“これらの土器は現在一般的に関山Ⅰ式土器といわれているものの範疇に含めて考えて大過ない”とおおよその位置付けを与え、他の遺跡・遺構の関山Ⅰ式と比較し、“類似するものとして、二ツ木第2貝塚の土器”を見出した。撚糸側面圧痕がない点で二ツ木との差異を指摘した。“本住居址の土器を関山式土器の最古の部分に置くことも可能”とした。

佐々木は1983年に打越遺跡の総括報告で、打越遺跡の住居跡別資料による関山式の5分案を示し、同年に論文化した。関山Ⅰ式は3段階に分けた。第1段階は打越169住とした。第2段階に高輪寺1住などを置き、第3段階は打越88住などとした。第2・3段階は概ね、庄野等のⅠa、Ⅰbに近いが、関山1住は第2・3段階の土器がともに出るとした。関山Ⅱ式は二つの段階に分けた。第4段階は井沼方5区1住、第5段階は井沼方2住などとした。鋸歯状ループ文が第5段階のメルクマールとした。

関山Ⅱ式の2分案は、普遍的でない文様を基準とし、研究史と乖離したものだったが、ループ帯文様の重要性を指摘した点で意義がある。

15. ★小出の花積下層式

佐々木1982と同じ号で小出輝雄が花積下層式の研究を発表した。この時期に見られる施紋手法・文様要素の有無多少を、19の遺跡・遺構で確かめ、3つの段階に区分した。

最古期(Ⅰ)は桑山の「菊名式」の時期で、これに縄文や貝殻背圧痕も加わるとした。新作D、白幡西の一部、菊名下層、内畑、花積7住、打越21住がこの時期とした。

第2段階は捺糸圧痕A種(蕨手状でないもの)がメルクマールとし、黒川東、梶山、足利、打越113住が該当するとした。

第3段階は捺糸圧痕B種(明瞭な蕨手状)がメルクマールとし、新田野、T.N.T.27、目沼1住、舟山、打越43住とした。

さらに、茨城県下の資料は、貝殻背圧痕を持たないことから花積下層式に含めないとした。

小出が捺糸側面圧痕A種として図示した例は小破片で、蕨手の部分が欠けただけでも見える。第2段階とした遺跡の多くにそのような破片が出ており、黒川東(1980年報告)のように典型的な蕨手文が出土した遺跡もある。また、T.N.T.27遺跡は「二ツ木」を巡る議論と絡み、花積下層式に含めるか検討が必要だった。

16. ★渋谷の花積下層式

桑山の遠い後輩に当たる渋谷昌彦は、静岡県木島遺跡の報告に携わり、木島式の細分(渋谷1982)とともに関東地方の編年も検討した。渋谷昌彦1983.04は、花積下層式が主対象ではないが、研究史の部分は花積下層式の研究史も同然である。未見ゆえに本稿で触れなかった桑山1949の概要も紹介されている。後述のシンポジウムに絡み、渋谷1983.12、1984.04でも神之木台式を論じた。

渋谷1984.11で花積下層式を正面から採りあげた。東日本各地の土器と比較した上で、捺糸側面圧痕文の形態に注目し、強く渦巻く段階、巻ききらない段階、円形竹管文を組み合わせる段階に区別し、花積下層Ⅰ～Ⅲ式と呼んだ。Ⅰ式の図版には打越174住や白幡西貝塚例などが示された。打越174住は後出の資料も混じっていると見られる。Ⅱ式は菊名貝塚例を主とする。なお、桑山1980にも強く渦巻く例があり、桑山は蕨手状から渦巻への変化を考えた。

渋谷の指摘した渦巻から蕨手への変化は、重要な指摘であり、花積下層式の古い段階についてひとつの指標をあたえたものである。円形竹管の配置が渦巻だった箇所^に当ることは確かだ

が、それゆえに、巻ききらない段階を挟んで出現するとはしがたい。出現ではなく普及がⅢ式⇨新田野期であろう。

Ⅲ式はT.N.T.27遺跡を代表例としており、貼瘤もあると評価している。小出同様、「二ツ木」問題に抵触する見解であろう。

渋谷が1983年までに公表した編年表では花積下層式が4段階に分かれ、“渦巻状の捺糸側面圧痕”の前に「木島Ⅲ式」並行の“有段口縁、隆帯”のものを置いている。それは取り消したのか、Ⅰ式に含むのかは不明瞭だった。

17. ★早期末シンポジウム

早期末の新型式の相次ぐ提唱を受けて、1983年に、神奈川考古学同人が「シンポジウム 縄文早期末・前期初頭の諸問題」を開催した。早期と前期の境界も話題となり、花積7号住が、下吉井式単純期と区別できる花積下層式古段階で前期初頭だとする意見が多かった(宮崎朝雄1983,新井和之1983)。

コメントで、高橋はこう述べた。

“今まで書かなかった菊名下層式設定のキッカケとなった土器 … は … 塩坂遺跡出土の土器 … 昭和41年頃、岡本先生や吉田哲夫さんたちと見に行き、内心これは一型式をなすものではないかと思った … 発表されておりませんでしたので、他にどこか似た遺跡はないだろうかどさがし … 江坂輝彌先生の書かれた報文などから、菊名貝塚の下層では塩坂で見たような土器が主体をなしていたに違いないと判断 … 菊名貝塚の報告書が刊行され … ほぼ予想通りの内容”(岡本ほか1984 p88-89)

塩坂遺跡は野内2010で紹介され、図示された復元土器7点のうち5点が高橋が言及した土器である。菊名貝塚で特徴的な、垂下隆帯を下によけるように曲る横位隆帯もある。整った横位羽状縄紋で口唇にも縄紋を施紋する土器と、それらより新しい時期と見える木島式も各1点図示された。

18. ■宮ヶ谷塔と貝崎

1980年、大宮市宮ヶ谷塔貝塚で“所謂二ツ木式期”の住居跡が4軒調査された。1981～82年には、区画整理事業に伴い、貝崎貝塚で多くの前期前葉の住居跡が調査された。特に、81年夏に調査されたB-23号住居跡からは、同時期の資料が膨大に発見された。82年3月付けでまとめられた宮ヶ谷塔の報告書で山形洋一は“花積下層式～二ツ木式段階では…短い原体を使い施文幅の狭い縄文帯を多段化…ループ文は…環部のみを隙間なく多段に施文…関山式では…環部が縮小し、長い足を持ったループ文”であることを模式図を用いて示した。

19. ■貝崎編年と「二ツ木式」の再定義

1984年、黒坂禎二が『深作東部遺跡群』（前期前葉の遺跡は貝崎貝塚）の報告で示した、前期前葉土器の分析は、その精度と体系性において画期的だった（当時大学生だった筆者は、実測図の質も含め、報告書の手本と感じた）。

まず土器分類の体系と用語を整備した。“主幹文様”の線描手法、“点状文様”、“単節縄文横帯区画法”、コンパス文などについて、既存の研究を踏まえつつ、時間差が反映する分類を行った。11軒の住居跡の出土土器を対象とし、各分類に該当する点数を数え、表で示した。そして組成比が自然な変化になるように配列を行い、それをそのまま6段階に整理した（この軒数で、連続する多数の時期に分かれることも奇跡的である）。貝塚名を冠し、貝崎第1～6段階と呼んだ。

黒坂の方法はいわゆる「セリエーション」であり、その見事な成功例といえる（日本の考古学教科書では、なぜか、近世墓標や銭貨などをセリエーション法による研究として紹介することが多い。それらは、暦年代が確かな資料に基づいており、セリエーション法の根拠となる側である）。見事であるがゆえに、各单位資料における組成をそのまま、ある段階の組成と誤解しないよう、注意しなければならない（黒坂は

その点に注意しており、各段階の解説で、ほとんど数値を示さずに相対的な要素の多少・増減として記述している）。

竪穴住居跡出土土器一括資料は、相互に排他的な時間幅を占有することはあり得ず、個々の土器片の製作から廃棄、廃棄後の移動などの過程を経て、竪穴構築以前に廃棄されていた土器から竪穴廃棄後に製作された土器までが混じっていることが普通である。各竪穴でどのように新旧の土器が混じるかも一定ではない。したがって、竪穴aの資料を段階Aの基準とした場合も、竪穴aの資料がすべて段階Aなのではなく、竪穴aの資料の主体を占める仮想的な組成が段階Aなのである。資料a, b, cがあり、bの組成がaとcの中間的な場合、段階Bを設定することは難しい。単なる混和かもしれないからである。ある組列でb固有のピークが確認されると、段階Bが設定できる可能性が生じ、独立した複数の組列でb固有のピークが確認されれば、段階Bを設定すべきである。黒坂は明文化していないが、そのように考えたはずである。

黒坂は、編年の確立を以って考察を一段落させた。庄野・下村編年と比較すると、第1, 2段階は二ツ木式、第3段階は関山I a式、第4～6段階はI b～II a式に相当する（庄野・下村はI bとII aを区別する基準を説明していない）。また、黒坂はそれらに続く段階を、井沼方2・5住に代表される組紐盛行段階とした（庄野・下村のII b）。

だが、黒坂は既存の段階名に当てはめることを優先しない。どのような呼称が適切なのか。キーとしたのは「二ツ木式」であった。黒坂は既存の諸論文の「二ツ木式」を比較した（駒形の研究の評価などは不正確である）。そして、羽状縄文土器群の細別に最も有効な指標は口縁部文様ではなく胴部縄文だと打ち出した（黒坂はこの発想の原点を山形1982とする⁽¹¹⁾）。

“二ツ木式土器は、主幹文様と点状文様による構成の単段口縁部文様帯を擁し、幅狭等間隔縄文横帯区画法を専ら用いる土器群である”

と定義してみた。そう定義すると、「新田野段階」も二ツ木式だという。縄文横帯区画法を基準とすれば、斜転位施文鋭角羽状(花積下層Ⅰ)→等間隔(花積下層Ⅱ)→幅狭等間隔(二ツ木)→幅広・異間隔(関山Ⅰ)→横帯崩壊(関山Ⅱ)と編成でき、他地方との比較にも有効だとした。神之木台・下吉井期の縄紋施文土器も花積下層式に含めたことに気を留めておく。

ちなみに、埼玉県内で関山式の細別に寄与した栗原、庄野、下村、山形、黒坂は同窓である。

(11) 南東北では、林 1960、秦 1977 などが、「桂島式」や「松原式」の縄紋帯の狭さを編年の指標に用いていた。

20. ■貝崎編年の広がり

下村は 1986 年に、施文原体の変遷による前期前葉の編年を解説した。限られたページ数で、多様な原体と各段階の実状が巧に示された。

段階の表現に新規な点があった。「型式」「細別」「段階」の三階層を設け、型式では二ツ木式を独立させた(範囲は黒坂と同様)。花積下層式はⅠ～Ⅲに三細別し、花積 7 住段階、菊名段階、野中段階とした。野中段階は、菊名段階に近いが主幹文様に円形竹管を加えるとした。新田野段階と深東 D5 住段階を二ツ木Ⅰ、深東 B23 住段階を二ツ木Ⅱとした。花積下層的要素の払拭で線を引いたようだ。

以下も遺構名を段階名とするが、貝崎編年に対応し、4 つの段階を経て、井沼方 2 住段階を関山Ⅲとする。関山Ⅱ式の新段階という定着した位置付けから切り離して別の細別とする理由は示されなかった。

下村と同じ号で新井和之も関山式の成立と終末を論じた。関山Ⅱ式から黒浜式への変化は黒浜式の論文でよく参照されるが、二ツ木式についても多くの記述がある。“二ツ木式はそれ自体 2 細分されるが、二ツ木Ⅰ式はさらに新田野段階と宮ヶ谷塔第 4 号住居址段階に細分を考える必要がある … 二ツ木Ⅱ式は貝崎遺跡 B-23 号住居址が好資料”とし、二ツ木式 2 分案の典拠は黒坂 1984 とした。黒坂は二ツ木式に 3 つ

の段階があるとし、Ⅰ・Ⅱに分けていない。宮ヶ谷塔 4 号住居址が第 5 貝塚地点(山形 1982)4 号住のことであれば、黒坂は貝崎第 1 段階としている。したがって、新井の 2 細別は下村の方と等しい。“二ツ木式の大きな特徴は沈線を一本書きで描出することである”と注意した。その他にも特徴を指摘した。

三田村 1987 は、黒坂・下村の段階設定に沿ってまとめられた。

21. ★森田の花積下層式

1985 年、富士見市貝塚山遺跡の報告書で、森田安彦が花積下層式を考察した。

森田は渋谷案を検討し、撚糸圧痕の形態だけでは不十分として、文様帯の構成も重視した 4 分案を示した。Ⅰ段階は菱形・弧状など単純なモチーフで胴部に縦走縄文の段階。Ⅱ段階は文様帯が重帯化せず広い帯内で文様を構成する。太い原体の渦巻は東北系とする。Ⅲ段階は重帯化し、各帯に 1 段、巻ききらないモチーフの段階。Ⅳ段階はいわゆる新田野段階で、円形竹管が組合うとした。

1991 年に、蓮田市天神前遺跡(黒浜貝塚群)の報告書で再論した。花積下層式の成立期と評価する、幅狭な文様帯を持つ福島県内の資料・遠下第 5 群・埼玉県内の資料を比較した。また、撚糸側面圧痕文が 5 つの段階とし、第 1～4 段階は上掲に対応し、第 5 段階は貝崎第 1 段階とした。上記の幅狭な一群は第 2 段階とした。第 1 段階と第 5 段階は花積下層式の範疇に含めることをためらった。

6) 群馬編年期(1986～1997)

1. 概要

群馬県域でも埋蔵文化財保護体制が整うとともに、赤城山麓などで、前期の集落跡が多数発見されるようになった。福島県でも公共事業を原因とする前期初頭遺跡の報告が相次いだ。それらの資料により編年が再検討された。

2. ■谷藤の二ツ木式

1986年、谷藤保彦が赤城村諏訪西遺跡を報告した。前期前葉の土器について、文様帯内の描線の手法で分類し、撚糸側面圧痕の1類を新田野段階花積下層式、細隆線と撚糸側面圧痕を併用する3a類を二ツ木Ⅰ、細隆線の3bcd類を二ツ木Ⅱ、棒状工具等の単線による4abc類を関山ⅠA、半截竹管による4defg類を関山ⅠB(以下略)とした。一つの要素をそのまま編年の基準としたのであり、青木案に近い。

谷藤は1988年に論文にまとめた。やはり主文様の描線を重視し、撚糸側面圧痕で描き「八」字状刺切文を充填する1類、撚糸側面圧痕で描き刺切文は粗い2類、刻み細隆帯による3類、平行沈線による5・6類(両者の区分不明瞭)とした(4類は、1～3類の区画文のみのもの)。そして1・2類を二ツ木Ⅰ式、3類を二ツ木Ⅱ式、5・6類は関山Ⅰ式の古い段階とした。2・3類に沈線を併用するものがある点については、南関東の地域性として始まると考えた。文様要素で各型式を分離できる根拠は示さなかった。

1類から二ツ木式とするのは、青木・黒坂の見解に沿っている。沈線を二ツ木式から分離するのは青木と共通するが、寡少な見解であり、二ツ木第2貝塚の主体的土器と乖離する。

3. ★三原田城遺跡とタタラ山

1987年に三原田城遺跡の花積下層式が報告された。群馬県で初めての当該期のまとまった資料だった。報告した谷藤は、渋谷の4段階区分の2～3段階に比定した。明記はないが、貝殻背圧痕などを伴っていないようだ。

同87年、奥野麦生が白岡町タタラ山遺跡第1地点を報告した。土器の様相から渋谷のⅠ式に比定し、さらに、2号住・3号住は、撚糸側面圧痕が主に横位に直線的に展開し、渦巻文を伴わないことなどから、Ⅰ式(古)とした。

谷藤と奥野は桑山、渋谷の同窓の後輩であり、花積下層式研究における系譜ともいえる。

4. ★折原の花積下層式

また、打越遺跡の大規模調査の初期(則ち富士見市立考古館の創成期)を支えた一人である折原繁も、1988年に花積下層式の分類と分布を検討した。検討した範囲は神奈川・東京・埼玉・千葉・茨城だった。

5. ★福島県の「花積下層」式

その頃、福島県でも、前期初頭の遺構一括資料が次々と報告された。文様帯が狭い段階の資料が多かった。鈴鹿良一が「花積下層式」として細分を行った(鈴鹿1987, 88, 89, 鈴鹿ほか1990)。鈴鹿は、文様帯区画に縄などによる刺突(刻み)列を伴う段階から花積下層式とし、隆帯で区画する段階はそれ以前とした。

6. ★五目牛清水田と久保田

1992年、藤巻幸男が、整理中の赤堀町五目牛清水田遺跡^{ごめうし}の理解のため、群馬県の早期末～前期初頭の様相をまとめた。翌93年、五目牛清水田遺跡を報告した。文様帯が重帯化せず、狭い文様帯に撚糸側面圧痕で、渦巻を伴う多段の菱形文を描き、体部も菱状の縄文が多用され、尖底の一群がまとまっていた。このような段階から前期とした。

同年、谷藤は、藤巻案に異論があるとして、富士見村久保田遺跡などの資料を紹介した。南関東では下吉井式等に伴う、鋭角縦位羽状縄文を体部に施し、口縁部の狭い文様帯に撚糸側面圧痕を施文する土器のまとまりである。渋谷説に沿い、このような段階から前期とした。

7. ★縄文セミナー1994

翌冬に開かれた縄文セミナーは早期末～前期初頭がテーマとなった。関東・北信越・東北の縄紋施文系土器の編年を目指した。谷藤は久保田、五目牛清水田、三原田城跡をそれぞれ代表例として花積下層Ⅰ～Ⅲ式を提唱した。その直前には外播山^{そとしらじやま}遺跡の羽状縄文と口縁部隆帯をもつ土器を置いた。金子直行は神之木台期を第

I 段階、第II段階は 1989 年に自ら報告した秩父郡下段遺跡したんだで代表される段階、第III段階が花積 7 住の段階、さらに撚糸側面圧痕が渦を巻かない段階、次に所謂新田野段階とした。第II段階にも東北北部から関東に至るホライズンがあり、前期初頭は第II段階でも第III段階でもかまわないとの姿勢を示した。渋谷の発表もあり、前期初頭を古めに置く意見が強かった。直後に、7 回目のセミナーで始めて記録集が出版され、江坂や中村五郎の貴重なコメントも記録に残された。中村によると、

“山内先生がお亡くなりになる頃 … 資料が非常に増え … その中で … 菊名貝塚の資料、花積下層の代表と考えた。私は一つの見方として、菊名から出ている土器は恐らく山内先生は前期の土器と理解していたんじゃないか”(p117)

8. ★セミナーの余波と余韻

セミナーの直後、吹野富美夫は、セミナーで対象外だった茨城県の早期終末から前期初頭を論じた。ひたちなか市武田遺跡の縄文条痕系土器を外播山並行で早期末とし、遠下 5 類のうち、口唇部が内削ぎ傾向の遠下遺跡などを第 I 段階で谷藤の I 式、鈴鹿の羽白 C 遺跡 I-5 類並行とし、外傾傾向の森戸遺跡を第 II 段階で谷藤の II 式、鈴鹿の羽白 C 遺跡 II-1 類(羽白 D II-0 類)並行とした。なお、遠下 5 類は“花積下層式土器の一つの系統”と位置づけた。森戸例を図化し、断面に注目したことは重要だが、わずか 4 点であり、時期を分離する根拠としては弱い。

同様にセミナーで対象外だった千葉県の花積下層式を安井健一 1995, 1997 がまとめた。安井 1997 では、1 期としていわゆる茅山上層以降の多様な土器を集め、2 期は羽状縄文出現期として 2 遺跡を示したが、花積 7 号住より後発的な様相が強いとした。大部分の資料が新田野段階直前の 3 期に属するとした(図版の配列からは、執筆途中まで、石場遺跡や神門貝塚の一部を 2 期としていたようである)。

渋谷は 1995 年に長い論文をまとめた。前半

は、早期末～前期初頭の研究史を東北から東海まで目配りしてまとめた。後半は福島県の資料を花積下層 I～III に整理した。渋谷 1984 と異なり谷藤編年に近い(それについての説明は欠く)。ただし、III としたものは五目牛清水田の新相に伴う東北的な土器と近いものを含む。

金子は 1996 年に、花積下層式成立期を再論した。“北西関東地方から南東北地方にかけての地域で、横帯構成を基本とした原体の長い菱形羽状縄文が成立する可能性の高いこと”を論じ、また、神之木台式の蕨手文等から下吉井式の沈線渦巻文が成立しその影響で渦を巻く撚糸側面圧痕文が成立するとした。

谷藤は 1999 年に“花積下層 I 式土器”を広域的に検討した。

9. ★滝の宮坂遺跡

1997 年、君島勝秀が桶川市滝の宮坂遺跡たきのみやざかを報告した。下吉井式と、幅狭口縁部文様を持つ縄文条痕土器が出土した。君島は 2005 年に再検討し“下吉井式併行期の段階をもって花積下層式の出現段階とし、前期のはじまりと考え”た。滝の宮坂遺跡については、図示資料の 1 割(9/91)を占める貝殻背圧痕に注意したい。同時期の坂戸市中耕遺跡やさいたま市宮ヶ谷塔遺跡では貝殻背圧痕を伴っていないことから、慎重な評価が必要だが、この地域で貝殻背圧痕が出現した可能性がある。

7) 関山式の再検討 (1998～2012)

1. 概要

千葉県の学史的資料が公開された。群馬・新潟での前期前葉資料の増加を背景に縄文セミナーでも関山式並行期が取上げられた。

2. ■千葉の関山式

1998 年、南山大学が所蔵する、二ツ木向台貝塚(旧・二ツ木第 2 貝塚)の主要な資料が千葉県史の資料として公表され、合せて千葉県内の二ツ木期の資料が集成された。

2000年、松戸市境外Ⅱ遺跡^{けいがい}が報告された。井沼方期であり、峰村篤は組紐系施紋の広域的な動きを整理した。

同年、山内資料に含まれる幸田貝塚資料が報告された。報告者の一人である上守秀明は翌年、特殊な結節原体の復元案を示した。

3. ■「二ツ木式」を採用しない研究

1998年、小薬一夫^{こぐすり}が多摩ニュータウンNo. 27遺跡第2次調査の報告をまとめた。貝崎第1段階に相当する資料だが、“花積下層式最終末段階から関山Ⅰ式の最古段階における過渡期”とし、「二ツ木式」には消極的だった。

2001年に青山俊明が「花積下層式」の充填文の変化を検討した。撚糸側面圧痕に沿って並べるB類から圧痕と無関係に充填するD類へ配列したが、「新田野」「二ツ木」の研究状況を理解していれば、D類が「新田野」、B類の一部とC類が「二ツ木」であることを知り得ただろう。

4. ■谷藤の再検討

2002年、谷藤は群馬県、特に赤城山麓で二ツ木式期の調査事例が増加したとして、1990～2001年に報告された8遺跡（うち7遺跡が赤城山麓）を紹介した。

細分は谷藤1988と同様だが“圧倒的に1式とした土器が多い。2式となる土器は僅か”であった。2式については未報告の見立峯遺跡の内容が期待できるとした。“現段階での1・2式に細分した二ツ木式は、1から3段階の文様変遷を経ることは先に述べた通りであるが、その実態としての時間幅は意外に短いことが予測されることであり、特に2式とした内容は極めて短い状況にある”と、変遷観が実態に合わないことを半ば認めた。事例紹介でも、爪形刺突列や沈線で主幹文様を描く箱田遺跡群J21住について“二ツ木式の範疇に含めざるを得ない。二ツ木式の新しい段階(2式)を再度検討する必要がある”とした。

5. ■埼玉県北部の関山式

2005年、黒坂が岡部町（現・深谷市）宮西遺跡の前期前葉の集落跡を報告した。時期は花積下層末期から関山Ⅱ式前半まで分散する。出土量がまとまるのは関山Ⅱ期に限られるとして、多段ループ鋸歯文の評価や、“ループ文による施文帯間強調が少ない”こと（松本2007を参照すると、単段ループの少なさを指すようである）、コンパス文の代替としての刺切文があること、関山Ⅱ式期に西関東と神ノ木式圏が「櫛状工具圏」となり、櫛状工具を欠く常磐地域と対峙する、などの地域性を論じた。

2007年、行田市馬場裏遺跡が松本美佐子により報告された。井沼方期の遺跡であり、黒坂1984の分類に沿って遺構別に集計を行った。黒坂2006.05の組成表に宮西遺跡と馬場裏遺跡の主な住居跡を加えた。馬場裏遺跡の中で新旧の様相に分かれること、宮西遺跡と通ずる地域色があることなどを指摘した。

6. ★■茨城の縄文土器

2006年、斎藤弘道が茨城県の縄文土器各型式の解説書をまとめた。各型式1頁程度の解説と数葉の実測・拓影図版を示した。前期初頭～前葉は遠下式(1葉)、花積下層式(5葉)、関山Ⅰ式(3葉)、関山Ⅱ式(5葉)という構成であり、遠下式(川崎ほか1990が命名)は“花積下層式土器の直前”と位置づけた。

花積下層式として示された資料は新田野段階以降がほとんどで、貝崎第1段階と推定される資料もあるが、図示の範囲では主幹文様は撚糸側面圧痕のみである。

関山Ⅱ式期の地域性の指摘として「森東式」にも言及している。なお、同じ時期・地域に、近似した範疇の「相互刺突文」「下平石式」なども提唱されている。本稿ではそれらの研究の紹介は省略した。

7. ■縄文セミナー2006

2006年の縄文セミナーは前期前葉を再検討

した。発表要旨・資料集と記録集の併読が必須である。

黒坂は、貝崎編年の丁寧な解説をした。記録集に収録された当日資料に集約されている。

谷藤は豊富な新資料を紹介しつつ、編年案を解説した。

細田勝は関山Ⅱ式を貝崎 5・6 段階相当と井沼方段階に二分した。井沼方段階に共伴しない「大型菱形文」や「相互刺突文」が時間的には平行するのではないかという持論も述べた。

8. ★■セミナーの余韻

翌 2007 年、谷藤は茨城県の花積下層～二ツ木期の様相をまとめた。二ツ木式の特徴的な文様を“口縁下および口縁部文様帯区画に刻みをもつ細い隆帯を巡らせる、撚糸側面圧痕による蕨手文様の単一化、刺切文等充填”とした。これは新田野段階の説明にほかならない。

9. ★下組と菊名

2006 年、前年に下組東遺跡から発見された貝層が報告された。概要のみの報告だが、花積下層式の新しい段階とするにふさわしい土器様相が窺えた。

2008 年、菊名宮谷貝塚の報告がまとめられた。1972 年に調査されて神奈川シンポで一部が公表されていた資料である。地点・層位により条痕・擦痕・無文と貝殻背圧痕・縄文の比率が異なったが、明瞭には分離できなかった。

10. ★タタラ山編年

2008 年、タタラ山遺跡第 2 地点が報告された。奥野は豊富な住居跡出土資料を 3 期に区分した。1 期には条痕文、条痕撫で消し（下吉井系）や尖底・丸底が多く伴い、角頭状口唇で、縄文の施文幅が広く、撚糸側面圧痕は隙間なく巻かれるなどの特徴がある。花積 7 号住並行とした。2 期には、条痕・条痕撫で消しがなくなり、貝殻背圧痕が増加する。縄文の施文幅は狭くなる。撚糸側面圧痕は隆帯や鋸歯状沈線と複

合する傾向が強くなる。3 期には貝殻背圧痕がさらに増え、撚糸側面圧痕文が更に精緻になる。

1 期の特徴は明瞭であり、2 期と 3 期の差は小さい。また、1 期に伴うとする木島式の特徴は他遺跡では 2・3 期相当の資料に伴う。1 期の基準となった 35 号住は、個々の資料の出土状況が示されていないが、主体となる古い特徴を持つ復元可能個体の一群の他に、2・3 期にあたる破片も報告されている。木島式も破片であり、1 期という位置付けは保留すべきだろう。

そのような問題はあるが、まとまった遺構出土資料の比較により、大宮台地における花積下層式の変遷が提示されたことが重要である。

11. ■上守の結節再論

上守は、結節 B と称する復元原体と圧痕について再論した（2009, 2012）。しかし、復元案の説明が不足し、筆者には再現できなかった。上守が集成した事例には 8 の字結びや二重片結びを含んでいるように見える。

8) 花積下層期の地域関係（2015～現在）

1. 概要

編年細分を主眼とした研究は乏しくなり、地域関係に力点を置いた研究が展開されている。

2. ★上原 I 遺跡

2015 年、八ッ場^{やんぼ}ダム建設に関わり調査された長野原町上原 I 遺跡が報告された。花積下層 I 期を主とし、塚田式も伴う地域である。向出博之が、当該地域の状況を整理した。

なお、2005 年に赤城西麓の今井見切塚遺跡（赤堀町・前橋市）でも花積下層 I 期の良好な資料が報告されている（図 3）。

3. ★鈴木宏和の研究

鈴木宏和は、前期初頭の研究を 3 本の論文に展開した。

鈴木 2019 では、関東～東北の撚糸側面圧痕紋土器を、器形・口縁部装飾・頸部文様構成・

頸部充填装飾の4つの属性で分析した。花積下層Ⅲ式期は遺跡も多く、地域差が明瞭だとした。器形では、口縁が外反するⅠ類が主体の南関東、Ⅰ類と口縁が内屈するⅡ類が併存する北関東、Ⅱ類と口縁が緩やかに内湾するⅢ類が併存する南東北、Ⅲ類主体の岩手^{ちげい}領域、と区別した。花積下層・上川名・千^{ちげい}鷄の各式と概ね対応する。頸部文様でも、横位区画される多段構成のⅠ類が関東を中心に分布し、単段構成のⅢ類は東北に分布する。口縁部装飾は、山形(鋸歯状)文のⅠ類が関東を中心に南東北太平洋側まで分布し、矢羽根状のⅣ類は関東のみに分布する。上川名式分布圏が東西に分かれるとした。頸部充填装飾では地域差が出なかった。新田野段階では地域圏が再編されるとした。

口縁部装飾の分布図でⅠ類を出土しない遺跡のマークがなかったりするなど、初歩的なミスも多いが、意欲的な論文である。関東地方内の地域差も、貝殻背圧痕や無紋の比率差で認識されていたが、撚糸側面圧痕紋土器だけでも明瞭な地域差があることが示された。

鈴木 2020 では、花積下層式に対応する上川名式の細分を図った。前年の論文では東北南部の編年を、相原淳一や早瀬亮介の研究(後述)に準拠しており、花積下層Ⅰ・Ⅱ式の2時期に上川名式第1段階が対応していた。鈴鹿良一 1989などを参照して、口縁部装飾技法で細分し、また、胴部の羽状縄紋が、異原体が相互に重ならないように施紋する段階から、縄紋が重なり原体の閉端(鈴木は環付末端と表現するが誤り)が明瞭に見えるものが出現する現象により、上川名式第1段階の細分と花積下層Ⅰ・Ⅱ式が対応するとした。上川名式の細分は福島地域の編年としては早くから指摘されていたことである。宮城県域で同様の変化があるかは論じていない。羽状縄紋の帯間線の強調は、黒坂も注意したことだが、花積下層式前半の細分では明示されていなかった。

鈴木 2021 は、大きく二つの部分から構成される。鈴木は、沈線で挟まれた刻み列による横

位区画された鋸歯状文を「複合鋸歯状文」と呼び、花積下層Ⅲ式と上川名式第2段階をつなぐ文様としている。その成立過程を知ろうと、まず沈線区画横位刻み列に先行する隆帯の起源を探る。上川名式1a段階の隆帯は遠下式に由来するとし、花積下層Ⅰ式の隆帯は塚田式に由来するとする。“先行研究では、遠下式の成立母体については明確に述べられていない”として、羽白C遺跡74号住などの外面撚糸紋、内面条痕、口縁直下隆帯の土器をその祖型とする。

「遠下式」は遠下遺跡第5群を川崎他 1990が型式設定したものだが、鈴木はその分布が福島県域では上川名式と重なるとする。さらに、羽白C遺跡74号住などは、以前から鈴鹿が第Ⅰ群5類として問題にしてきた土器である。鈴木が示した事例は福島県一帯に分布している。なぜ、上川名式が「遠下式」を経由して隆帯を獲得する必要があるのか、そもそも上川名式と伴出する遠下第5群が別型式なのか、「型式」概念を整理する必要があるだろう。また、関東地方西部の花積下層式に伴う隆帯文を広く塚田式としているようにもうかがえる。隆帯文という、それ自体は限定性が少ない要素について、上川名式や花積下層式の成立過程を論ずることが無いまま、すべて他型式からの借用とするのであれば早計だろう。

後半は、上川名式第2段階に鋸歯状文が導入された理由についてひとつの解釈を示した。

なお、この論文は黒坂の指導を受けたとある。

4. ★出井南遺跡

2023年、板橋区^{てい}出井南遺跡が報告された。狭い面積で花積下層期の^{てい}縦穴20基が切り合っている(報告者は炉跡が確認されたもののみ住居跡としている)。宅間清公がまとめたとおり数点の新田野段階をのぞけば大部分がそれに先行する段階でまとまる。武蔵野台地の花積下層式の基準となるだろう。ただし、撚糸側面圧痕文の復原個体を欠く。

翌24年、本稿の推敲中に、谷藤による出井

南遺跡の検討が公表された。新田野段階主体と評価している（その論拠には疑問もある）。南西関東で下吉井式の系譜の幅広隆帯が用いられることや、無紋で口縁下に隆帯を巡らせる土器があることなどを論じる。特に目新しい主張とはいえない。問題は、下吉井系土器の研究として、渋谷の研究のみを紹介し、高橋 1981 に触れていないことである。渋谷の3細分は遺跡の実態と合っていない。そして、出井南遺跡の無紋系土器は高橋の「菊名下層式」の特徴を持つ。研究史の公正な評価を自戒したい。

II. 筆者が考える「花積下層式」「関山式」

1) 「型式」の特徴

1. 大きな流れ

東北地方の影響を背景に、関東地方固有の特徴を持った撚糸側面圧痕をもつ羽状縄紋系土器が成立し、「擦痕系土器」（岡本勇に倣った仮称。打越～下吉井式）の分布域に広がって、在地の伝統を吸収していく。幅広隆帯の採用や貝殻背圧痕紋が、在地の伝統に由来し、南関東の特徴。

花積下層～関山式は、代表的系列が、長期にわたり連続的に変化する。花積下層式成立直前の北西関東の様相は不明瞭であるが、すでに羽状縄紋や隆帯を持つ土器群が広がっていた。

2. 花積下層式の概要

基本的な特徴とされてきたのは、口縁部の撚糸側面圧痕文（蕨手文など）、体部の羽状縄紋（無節や結束もあり）、折返し状口縁、充填鋸歯文、隆帯区画、貝殻背圧痕紋などである。

花積下層期は地域圏の再編過程であり、地域差が大きい。南西関東の下吉井式伝統と北関東の花積下層系が地域差を織りなす。貝殻背圧痕は中間地域で発達したらしい。

3. 関山式の概要

基本的な特徴とされてきたのが、口縁部は沈線（主に割管対線⁽¹²⁾）による斜線を組合わせた文様と貼瘤。ループ紋を伴う羽状縄紋。口縁

の小突起。コンパス文。

隆帯が沈紋化するが、小円形文は貼瘤となる。かたや凹み、こなた凸む。

(12) いわゆる半截竹管による沈線。素材が竹とは限らないので、筆者は(半)割管状工具と呼び、2本組み沈線を対線と呼んでいる

4. 各型式の変化の特徴

「花積下層」と「関山」という2つの枠で捉えた方が変化の特徴がつかみやすい。

花積下層式は、同種の装飾要素（単節または無節の斜縄紋、隆線、撚糸側面圧痕）を用いて、構成方法を変えていく。

関山式は、施文材（施文具と貼付土を合せた概念として造語）や体部縄紋の変換が激しい。

すわなち、変化の仕方が異なる。

花積下層式期は隣接する（東北・信越）地域と類似性が強い。特に撚糸側面圧痕が共通する特徴となっている。関山式期は、主文様の描線がどう置換されるかと文様帯の配置で他地域との差が明確化する。

5. 「二ツ木式」の評価

「二ツ木式」に肯定的な研究者でも立場がいくつかに分かれる。大きくは、関山式と分離できるとする立場と広義関山式の一部という立場である。

駒形 1972 は、“花積下層式・二ツ木式・関山Ⅰ式・関山Ⅱ式”と表現し、前者であるとともに、細分した関山Ⅰ・Ⅱ式も同レベルとする。

黒坂 1984 もこれに近いようである（花積下層もⅠ・Ⅱに分ける）。

下村 1986 と新井 1986 は、二ツ木と関山を同レベルにおき、二ツ木をⅠ・Ⅱに細分する。

谷藤も関山と同レベルに置いている。

黒坂 2006 は、広義関山式の一部とし、関山Ⅰ・Ⅱと同レベルとする。

「二ツ木」を関山から独立させるかは、まず学史的経緯を確かめよう。篠遠は、日本先史土器図譜における山内の記述と比較し、異条縄文

や片口式土器がないことを根拠としながら、中間型式と考えた。しかし、その二つは、その後、関山式内の細別の指標となった。

前期前半の三分は甲野の研究が原点として参照されるべきである。甲野 1935 は、第三群の解説で、半截竹管以外の1本書き2本組沈線や隆起線による文様もあると記し、1本書き2本組沈線による波状文も図示している。二ツ木貝塚の土器は、甲野第三群の中に収まる。

日本先史土器図譜も、関山貝塚例は、二ツ木の資料と遠くない。

二ツ木貝塚の資料が未報告で、類例も増えなかったことや、藤岡貝塚を関山式の代表例とすれば差異があることから、細分を志向する者は“区別できる”という意識が先立ってしまい、関山式の中で捉えづらくなったのだろう。

そして、駒宮や庄野が、「二ツ木」を除いて「関山Ⅰ」を定義したことから、関山式の細別として細別名を与えにくくなった。

しかし、関山式一般と区別できる二ツ木式の一般的特徴は指摘しづらく、むしろ、「関山」を特徴付ける諸要素の出現（普及）期である。

谷藤 1986 は、文様を細隆線で描くことを二ツ木式の特徴とし、沈線で描くものは関山式と分類したが、一括資料で、細隆線主体期は指摘されていない。

「新田野段階」を二ツ木式（期）に含めるかも問題である。黒坂 1984 以来、含める意見が主となっている。黒坂の論拠は、下村 1981 や山形 1982 を参照しながら、口縁部文様帯が一段になって関山的であり、体部縄紋が幅狭等間隔になっていることである。しかし、文様帯が多段なのは、花積下層式を通した特徴ではないし、「幅狭」は共通しても通常の羽状縄紋と環付縄では、外見がまるで違う。

おおよそ、型式の分類は、学史的にも、整理の現場でも、まず製作技術的特徴（「厚手」「薄手」「繊維」など）、次に装飾の手法・単位図形などで、「型式」を絞り込み、その後、全体的な構成を見るという手順で進められてきた。

型式境界で厳密に分離するものではないとはいえ、擦糸側面圧痕は花積下層、ループ紋は関山と仕分けられている方が、学習上も、実務上も困らない。

新田野段階は花積下層式とすべきであり、「二ツ木」は関山式に含める。関山Ⅰ式に含めるかは悩ましい。変化の幅・段階が多すぎる。40年ほど前、某々^{ゼロ}0式という提案が続出したことがあるが、定着したのは布留0式ぐらいだ。関山0式と呼んでも定着しないだろう。現実的な落としどころとして、変則的だが「関山式二ツ木期」と呼べば、まぎれが少ない。階梯的な位置付けとしては黒坂 2006 と近いことになる。

2) 筆者の編年観

1. 花積下層式の段階の整理

森田 1985 と谷藤 1994 の段階設定および序数は概ね対応する。筆者も大きな異論は無い。渋谷 1984 は序数が一つずれるが、渋谷 1995 で谷藤案を採用した⁽¹³⁾から、あえて別呼称を提起することもないだろう。

- ・縄紋は縦位羽状から横位羽状へ
- ・文様帯は 狭→拡幅→分帯→選択
- ・隆帯は前時期に文様として存在し、区画文となっていき→文様帯内に進入

I期 口縁部文様帯が狭い。体部には多様な羽状縄紋があるが、斜転の手法による縦長羽状縄紋が目立つ。概念化すればT字状。主体的分布は北西関東。花積下層式には含めるが早期末とする（後述）。尖底が主。

II期 口縁部文様帯が広がる。横長多段菱形構成。強く渦巻く。円形竹管出現。口唇は角頭状主体。体部は横転羽状縄紋。菱状も目立つ。概念化すればX字状。南西関東は太隆帯区画、貝殻背圧痕紋が高い比率を占める。丸底が多いが平底もある。

III期 主文様帯を分帯。細隆帯区画によるものが多いが、擦糸側面圧痕によるものも。一つの帯内は右向き蕨手鋸歯状。口唇装飾が折返し状口縁へ発達し、充填鋸歯文など。主図形外に

短線（刺切り）を充填。刺切紋は、主幹線に対して斜になるように並列。体部は横位羽状縄紋。南西関東は太隆帯区画、貝殻背圧痕紋が高い比率を占める。平底。

IV期（新田野段階）主文様帯は1帯のみ残すが、群馬では帯内2段のものも目立つ。対称配置出現。刺切紋は主幹線と関わりなく矢羽根状、あるいはパッチ状（同方向数個の刺切がブロックとなり、隣接ブロックとは方向を変える）。撚糸側面圧痕文を持つものは折り返し状口縁でなくなり（文様帯が無いものには残る）、口縁に複列細隆帯。また、波状口縁で波頂下に細隆帯による単位文のものも。横位羽状を基本とし幅狭化の傾向。文様帯がある土器の地紋として結節や末端環が出現する。

(13) 愛宕原遺跡(丸山 1989)には新田野期の資料が多いが、渋谷はそれより先行する資料のみ花積下層式とした。

2. 関山式の段階設定

段階設定は概ね貝崎編年に準ずる（ただし、新田野段階は花積下層式とする）。

様々な面で、大きく3グループに分け、その中で新旧の様相とすると説明しやすい。

二ツ木期、関山Ⅰ式、関山Ⅱ式の順で要素ごとの変化を整理して記す。

3. 二ツ木期（貝崎第1・2段階）

花積下層式の要素が残存しつつ、関山式の特徴をなす要素が導入される。

前半（貝崎1）は主幹文様に刻隆線が進入するのと並行して刻隆線の梯子状沈線への置換（沈線化）が進む。主幹文様の描線に撚糸側面圧痕・刻隆線・ヘラ描き沈線が併存する。後半（貝崎2）はヘラ（または棒）描き沈線を主として半割管による対線も用いられる。

点状装飾として貼瘤が現われ、小円形文（いわゆる円形竹管文）との併存を経て主流となる。

波状口縁が2割程度ある。

刺切紋は配置が乱れたようになる。主幹線が無い同方向の刺切紋（というより無肋二枚貝腹

縁押圧）のみのものもある。

体部は短足ループが主となる。結節も目立つ。前半には貝殻背圧痕も多く残る。後半に短足ループが圧倒的な比率となる。底面施紋があることが普通。

4. 関山Ⅰ式（貝崎第3・4段階）

二ツ木期後半に出現した、半割管対線が主流となり（古段階。貝崎3古）、さらに多割管内皮線が主流となり（中段階。貝崎3新）、主幹文様の刻みが減少する（新段階。貝崎4）。文様帯は狭くなり、文様も直線化・単純化し、斜縄紋1段と近似になっていく。

小円形文は無くなる。貼瘤が盛行し、集合貼瘤のみの装飾帯も出現する。

集合角状突起が出現し（古段階）、縄紋帯を区画するかのごときコンパス文（半割管による）が一般化する（中段階）。

古段階に波状口縁が4割程度まで増えるが、中段階に急減する。浅鉢や片口土器が出現。

縄紋は環付長足の盛行を経て、環斜交互構成が拮抗するようになる。後者の方が装飾的で、帯内羽状も普通になる。結節、貝殻紋は稀（混入？）になる。底面施紋は減少。

5. 関山Ⅱ式（貝崎第5・6段階、井沼方段階）

関山Ⅱ式の特徴として指摘されてきた事項は、片口・注口付土器の増加、文様をもつものの減少、文様帯に地紋、櫛歯状施文具によるコンパス文、組紐紋、合撚、白歯状突起の増加と（片口の脇に付く）半円状突起出現、脚状底。貼瘤減少、波状口縁減少。

主に組紐の比率で新旧を認識されてきた。

組原体（組紐と組縄）は古段階（貝崎5段階）で1割程度、中段階（貝崎6段階）で3割程度。新段階（井沼方段階）で5割を大きく超える。単節縄紋は、末端環の無い単純な斜縄紋が増え、環付・長足、環斜交互と鼎立する。単純斜縄紋は水平施紋にこだわらず、0段多条でないものも多い。合撚が1割程度。

主幹文様は線を密接させるものよりも隙間を設けるものが多くなる。主幹文様を持つものが減少するため、内訳比率の誤差が大きくなる。

全面地紋施紋後に文様を描くため、成形単位の制約がなくなり、体部に文様を広げるものも現われる。

なお、ループ帯文様（磨消／斜転）は時期限定的でないが、南東北との地域関係を示しており、意義深い。

貼瘤は中段階に急減する。

突起は、中段階から白歯状が主流となる。新段階に板状が出現し、半円形は稀になる。

コンパス文は、Ⅱ式に入るとともに櫛状施紋具が主流となり、中段階から支点上下移動型（流水文状）のものが増える。

口縁部破片と片口・注口破片の比率から、片口・注口付が5割程度だった可能性が高い。

脚状底部が2割程度に増える。

3) 花積下層期の地域差と上川名式

1. 関東内の3地域

花積下層期の関東地方は、西南関東（神奈川・東京・埼玉南部）、西北関東（群馬）、東関東（茨城・千葉）の3地域に分けられる（もちろん、固定的な境界はない。概観であり、悉皆的な資料収集に基づく線引きはしていない）。

西北関東は、羽状縄紋系が主体であり、貝殻背圧痕紋や下吉井系は皆無も同然である。

西南関東は、時空的傾斜はあるが、貝殻背圧痕紋・下吉井系が多い。

東関東は、その南部をのぞけば貝殻背圧痕・下吉井系は稀である。Ⅰ期は「遠下第5群」が主となり、Ⅱ期は遺跡が乏しく、茨城に上川名系の撚糸側面圧痕文土器が分布する。Ⅲ期は、茨城も花積下層式の分布圏である。

2. 西南関東(1)貝殻背圧痕

西南関東の花積下層期の研究は、非縄紋系の土器との関係が重要である。

まず、貝殻背圧痕は、下吉井系をベースに、

隆帯上の押圧から、擬似縄紋として面的に施紋されるようになったとの見解が主流であり、異論は無い。

埼玉県中部のⅠ期滝の宮坂遺跡では図示破片の1割を占め、この地域で出現した可能性があるが、同時期の坂戸市中耕遺跡（杉崎他1993）や旧大宮市宮ヶ谷塔貝塚「5号炉穴」（山形1985）には貝殻背圧痕が無いので、滝の宮坂が単一時期でない可能性もある。

Ⅱ期のタタラ山35住で10%、花積7号住で17%あるが、神奈川県域のⅡ期を代表する白幡西貝塚では、図示された36片の中に無い。

Ⅲ期は、神奈川から埼玉中部まで、20～40%を占める。縄紋のみの土器と共通の器形・装飾が多い。撚糸側面圧痕文は通常、施さない。

この地域にはⅣ期の良好な資料がないが、貝崎第1段階で4割を占め、以後急減する。

3. 西南関東(2)下吉井系土器

神之木台・下吉井系土器の変遷は、高橋1981の整理が適正である。ただし、高橋自身の表が示すが、「菊名下層式」は、Ⅲ期すなわち「菊名上層」の遺跡での出土例が多く、その時期に伴う下吉井系土器でもある。桑山1980には、Ⅱ期の撚糸側面圧痕文もある。桑山1980で目立つ、下吉井期やⅢ期に例のない隆帯文・沈線文をⅡ期とすれば理解しやすい。Ⅱ期の層があったとすれば、それが「下層」と認識されたのだろう。菊名貝塚は、個々の土器の層位が不明なため、「菊名下層」は型式・段階名としては不適切である。塩坂も同様である。白幡西段階と呼ぼう。白幡西貝塚では狭義の下吉井式と分離しがたいものと「菊名下層式」を主とし、縄紋系が少量伴う。下吉井式の新しい段階と扱った方がよいかも知れない。

なお、渋谷1983.04の下吉井式編年案は、沈線のみで文様を描く「下吉井Ⅲ式」を新田野段階に並行させ、「菊名下層」に相当する土器をそれに先行するⅡ式に含めるもので、遺跡の実態と乖離し、採用できない。区画文と主文様が

ある狭義の下吉井式の範囲では、渋谷 2004 の編年案を肯定できる。

4. 「上川名式」の範疇

東関東の様相を論ずるには東北地方との比較が欠かせない。

現在、東北南部の前期初頭～前葉を代表する「上川名上層土器」「上川名式」「上川名Ⅱ式」は、加藤孝が 1951 年に報告した資料を標本とする（早瀬 2005, 2008 に阿部正哉作図の断面付き拓影図が載り、加藤報告資料の一部と初公表資料からなる）。林謙作 1960, 1965 は、上川名貝塚上層の資料を上川名Ⅱ式と呼び、それより新しい桂島式と「三神峯Ⅲ」を設定した。桂島式底面の半截竹管文様を二ツ木・表館と対比した。白鳥 1974 は、三神峯Ⅲ層（林と別地点で、林の略述した内容とは違いがある）も桂島式も上川名Ⅱ式と同時期とした。阿部 1980 で宇賀崎貝塚が報告された。相原淳一 1990 は白鳥の方法が正しいとしつつ、林と同様に資料の比較に基づき編年し、白鳥同様に大木 1 式直前まで「上川名式」として 5 グループに分けた。

以上の宮城県内の動向に対し、山形県と福島県では、上川名式を擦糸側面圧痕が多用される時期に限り⁽¹⁴⁾、それ以後の刺突列やループ紋文様の盛行期を「庚申町式」「松原式」「宮田Ⅲ群」などと呼ぶことが多い⁽¹⁵⁾。この時期のまとまった資料の多寡や有文土器の比率の違いが影響している。この種は本来「室浜」「上川名」に含まれていなかった⁽¹⁶⁾。

上川名貝塚上層の主体となる資料は、花積下層Ⅱ期併行とⅣ期併行に分かれるようである。

「上川名式」は上川名上層の主体的範囲と、それと密接に関連する段階に限り、宮田Ⅲ群に代表される、地紋にループ紋を多用し爪形・連続刺突・ループ紋で文様を描く一群（相原の d グループ。概ね関山式併行）は別型式とした方が分かりやすい。相原がⅣ期に含めた「桂島」は初期の宮田Ⅲ群に併行する上川名式の終末の様相である。松島湾周辺は以後、縄紋の構成は

宮田Ⅲ群と近似するが工具文様に乏しい、型式内の地域差とするか別型式とするか、材料が不足している。

(14) 鈴鹿 1989 や渋谷 1995 は福島県の当該期土器を花積下層式と扱った。吉田 1997 も上川名式を有段の器形に限る提案をした。擦糸側面圧痕文土器における花積下層式と上川名式の区別は鈴木 2019 が重要である。

(15) 林 1962 は、林 1960 でも言及した山形県野山遺跡の刺突列・コンパス文・ループ文がある資料を表館式並行とした。保角 1973 は刺突・爪形・ループ帯文様がある庚申町式を提唱し桂島併行とした。同時期に赤松 1973 は松原式を提唱し二ツ木併行とする一方、類似した内容の大峯原例は大木 1 式とした。竹島 1975 は充実した資料を報告し、宮田Ⅲ群と呼んだ。中嶋 1976 も庚申町遺跡を論じた。秦 1977 は松原式を再提起し、縄文幅の狭さで桂島に対比した。宮城県でも 1977 年に同種土器を含む金山貝塚が報告されたが、狭義の上川名式も含んでいた。

武藤 1988 は上川名以降大木 1 式以前を、黒坂の研究を参照しつつ 4 段階に分け、変化の方向を示した。

福島県では、吉田 1995, 1997、鈴鹿 1999 で大規模開発による出土資料が検討され、山内 2005 で研究史が整理され（山内は学生時代、宮田貝塚の報告にも関わった）、堀江 2006 が研究状況を整理した。

00 年代に、後藤勝彦が 70 年代に調査した早期終末～前期前葉の諸遺跡を報告した（2005, 06abc, 08）。そのうち桂島は林の報告に整合し、貝殻塚は大木 1 式に先行する資料を主とする。早瀬 2007 が福島県東北部を遺構別または層位別資料に基づき検討した。また早瀬 2005, 2008, 2017 は仙台湾周辺の前期初頭～前葉を検討した。

(16) 山内 1971 に次の記述がある。“ムジナ岩陰発見の図版第六七図の土器は繊維を含み、前期前半に属することが明らかであるが、私が前に指摘した室浜式と大木 1 式の間中に属する別の型式であって、私は戦前宮城県川下り貝塚で発見したが、そのまま発表を怠けて居る内に、見事な新資料と共にここに公表されるに至ったのである”

川下り（高松）貝塚については山内 1929.07 で最下の黒色粘土層から大木 1～8 式が混出したとあるほか、山内 1937 では早期もあるとしている。

山内 1930.01 の船入島貝塚採集土器に関する次の記述の方が、序文に適合し、記憶違いの可能性もある。

“(A)内面に條痕のあるもの(少数)と、(B)ないもの(多数)がある。後者には大木 1 及び 2 に同定されるものも、それ以外の一型式(?)に相当するものもある。… ある地点では、貝層中に B、以下黒土層に A と上下重畳して発見された・他の地点では、貝層中に B のうちの大木 1 に相当するもの、以下黒土層に B のうち大木に無いもの(多数)と内面條痕ある A のもの(一片)が出た”

内面に條痕があるものが層位的に古いだけでなく、大木 1 式より古い土器も多数出たのである。山内はそれが一型式にまとまるかは判断を保留した。船入島に続けて室浜の土器を解説し（前述）“室浜に特有な型式”と呼んでいる。船入島と室浜は区別されている。

その後、山内は船入島の土器に直接触れなかったが、山内から教える機会があった 4 氏の記述がある。

斎藤忠 1930 は、山内の調査の契機となった資料を報告した。室浜貝塚の資料は山内に指導された旨を特記している。船入島の資料については拓影と簡素な記述しか無い。

角田文衛 1936 は、貝層上・貝層上部から少し出た第四

類を大木 4 式および厚手式と比較し、貝層下の主体である第一類を榎木上層と比較した。一方、貝層で主体となる第二類は大木 1・2 式に対比しなかった（なお、第三類は薄手無纖維素文で、現・木島系との関係を気にしている）。

伊東信雄 1940 は、全面ループ紋のもの(左上)と口縁部多段ループ紋体部羽状縄紋のもの(右上)を図示し、“山内氏の所謂室浜式乃至大木第一式に相当するもの”とした。伊東 1957 でも「上川名式」に続く型式を大木 1 式とし、“船入島貝塚の貝層からもこの種の土器が出ている”とし、図版 3-B に掲げた「大木 1 式土器（船入島貝塚）」は伊東 1940 第十二図(右上)に石膏を入れたものである。また、遺跡表で桂島貝塚は上川名式とした。

加藤孝 1959 は、“大木第一式併行”の第一類、“上川名式土器と併行関係”の第三類と区別した第二類は“大木 1 式と型的に趣きを異にし … 上川名貝塚出土の上層土器より新しい”とした。また、桂島貝塚は上川名併行とした。

いずれも「船入島」を室浜・上川名に含めていない。

昭和 10 年代に山内が公表した編年表では、花積下層並行に室浜式、関山並行に大木 1 式のみ記されている。それだけならば「一型式(?)」は取り消したようにも見えるが、山内 1979 に、その時期についての記述がある。

“末端に環 (Loop) の付いた縄 … 関東の関山式では環付末端は最も盛行し … 陸前では前期の大木 1 式及び近似の、多分室浜式との間に位する一型式に見られる。環付末端が 1 指幅で数帯押捺されて居る。この場合では R^Lに属するもの [I2] のみで、関山式の如く L^Rと交互に圧される様な風習はない” (p18-19)

“関山式の結節回転 … この種の結節回転は … 陸前では室浜式と大木 1 式との中間に当る型式 [24 中段] にあるらしく” (p21)

当該論文は 1961 年に提出した博士論文に基づいており、その時点の見解と扱われるべきだが、母体となる原稿は“昭和 8、9 年頃に完成に近い状態になっていた”と山内は記している。また、1953-54 年の山内の縄紋講義のノート(鈴木編 2000)でも末端に環が付く縄は“室浜式と大木 1 式との中間の型式(名称なし)に認められる”と筆録されている。

大木 1 式の範囲に収まらない資料はあれど、型式名を付けるには資料不足に留まっていたということだろう。

これを前提に高島町史(佐々木 1971)を見ると、図版第 6～8 図(大峯原遺跡)にその種の土器がまとまり、特に第 8 図が良好な資料である。次のように推論する。

①山内は遺跡名なしで第六七図のように記した(または語った)。②編集者は第 67 図を指すと誤解し、遺跡名を補った。③序文は校正を受けることができなかった。

5. 東関東と南東北の様相

花積下層 I 期は、南東北から長野まで基層が共通する近似した土器が分布し、型式差としうる程度の地域差はあっても、個々の土器や分類を、必ずしも地域に特定できない。東関東から福島県東南部の「遠下第 5 群」は隆帯で区画した狭い文様帯に円形押捺ないし半円形撚糸押捺の多用が特徴的である。福島県の「羽白 D II 群 0 類」は文様帯が関東より広く、上下を隆帯で区

画し撚糸側面圧痕が多用され、菱状・横位羽状縄紋が主となる。同類は、宮城県南部でも北経塚遺跡北斜面 III 層にある。同遺跡 SI25 はこれより先行すると思われ、早瀬 2017 のように「上川名式」へ含めてよいかは疑問がある。

II 期は、その古い部分では、撚糸側面圧痕による横長菱形と渦巻を狭い文様帯に納める点では関東も東北南部も共通するが、東北南部は文様帯上下を縄押列や刺突列で区画する(新しい部分も同様)。新しい部分は両地域とも文様帯が拡張し、主幹線と渦以外は余白となるのが特徴である。主幹線は、関東では並列する撚糸側面圧痕のみが多いのに対し、南東北では撚糸側面圧痕の間に斜位の縄押列か刺突を挟んだ類梯子状の描線を多用する。また、関東では異なる撚りの原体を隣り合わせるが、南東北では L のみを用いる傾向がある。宮城県では単純資料がないようだが上川名貝塚や金山貝塚にあり、岩手東南部には千鷲遺跡(高橋他 1989)など、この時期でまとまる資料が多い。茨城県の田島遺跡例は南東北的である(図 4)。

III 期は、関東で折り返し状口縁が多用され、南東北では内屈口縁が多用される。関東の折り返し口縁は I 期に直接つながらず、口唇上平坦面が加飾部として発達し、外に傾きながら広がることで成立した。いわゆる鋸歯文は元は口唇上加飾である。南東北は口縁の内湾が強調され、内屈部として独立した。その装飾・文様は口縁部文様帯の最上部に由来するほか、関東の鋸歯文も転写された。松島湾周辺に好例を欠くが、岩手東南部で小松 20 住(吉田 2004)に好例がある。関東・南東北とも、撚糸側面圧痕文は、並列する撚糸側面圧痕を主幹線として描線間の空間に刻みを満たすもの(東北の II 期に連なる特徴)が広域で標準的になるが、東北で L のみを用いるものが目立つ傾向は続いている。東関東の花積下層期遺跡はこの時期以降がほとんどで、特徴は関東的である(図 5)。

IV 期になると、南東北では有段の器形が盛行する。これは、形態や文様から、木島式の影響

と考えている⁽¹⁷⁾。木島式の形態で羽状縄紋を施す土器は関東のⅢ期でも散見するが(図 9)、そのような土器から、口縁部文様が多様に変化したものである。撚糸側面圧痕文の系統は装飾が簡素化する。一方、花積下層式Ⅳ期によく似た(異なる撚りが対になる)撚糸側面圧痕文の土器も福島を中心に分布する。文様帯の横位区画を関東は刻み細隆帯とするが、東北は地域の伝統である刻み(または短縦側面圧痕)と撚糸側面圧痕の組合せによるので地域差はある。関東地方では東関東に遺跡が多くなる(図 7)。

(17) 類似した器形が盛行する新潟の布目式の場合は、直接の採用ではなく、撚糸側面圧痕文系の内屈部を拡張して相似の器形に変形したと見るべきだろう。

4) 文様と縄紋

1. 黒坂の「公理」

黒坂 1989.01, 1989.03, 1993 は、示唆に富む魅力的な論文である。縄紋前期の土器編年を学ぼうとする者には、必読文献と思う。

ただし、論文の性質から、個々の型式の実態に沿わない部分もある。関東では、黒浜式の古い部分の序列が、遺構の実態を無視した「所謂型式学」になっている。他地域でも同様のことはあるようだ。それはそれでよい。

黒坂 1989.03 の肝は“羽状縄紋系が生み出した構成は、「縄」が印す圧痕の方向線を唯一の起源とする”(p5)という「公理」(仮説)である。

撚糸側面圧痕による口縁部文様と、体部の縄紋の組合わせを出発点とすれば当たり前のようでもあるが、体部の縄紋が多様に変異する中で、その縄紋の条を工具で表現する文様が出現することが、この土器群の面白さであり、黒坂の例示の多くは肯ける。一方、口縁部文様は、撚糸を原体として図形を描いているものが別の施文具に置き換えられたところで、図形から図形であって土器群固有の面白味はない。図形でなく線の細部形態が、縄の圧痕の模倣だと狭義に解するならば、それには異論がある。

2. 口縁部文様の描線

花積下層Ⅰ期は隣接型式を含めて文様帯区画または主文様として刻み隆帯があり、各地でそれに先行する段階も、刻み隆帯を持つ。

花積下層式から関山式への変化は、文様帯区画に用いられていた刻み細隆帯およびそれを沈紋化した梯子状沈線が、文様帯に進入し(新田野期)、図形描線もそれに置換される(二ツ木期)過程である。細隆帯の刻みが羽状になるものは例外にすぎず、直交が基本である。これが梯子状の沈線に引き継がれる。

一方、南東北は、花積下層Ⅳ期(新田野段階)類似のもので、区画帯に用いる縦刻み(または短縄圧痕)を爪形紋に置き換えるものがあり、爪形列と撚糸側面圧痕の組合せを複数繰り返すものがある。そのような区画帯から撚糸側面圧痕が抜けると複列爪形紋となる。

さらに、連続爪形紋の中心を沈線で分割する「(仮称)背割り爪形紋」も出現する。これは対撚糸側面圧痕を模倣したものである⁽¹⁸⁾。これらや、それから派生した連続刺突で、文様帯内の図形を描くようになる。これは関東と同様に区画帯の手法が文様描線に展開したものであるが、側面圧痕の模倣が含まれている。それに加え、南東北では、原体の回転による縄紋帯を文様描線とするものもあられ、特に、爪形紋に類似するループ紋によるものが盛行する。さらに、全面横位施紋後の磨消で図形を表現するものもあられる。これら、並列連続押圧や回転圧痕帯で文様を描くものがいわゆる「宮田Ⅲ群」である。

(18) 表館式と同種の爪形紋列が撚糸側面圧痕の模倣であることは武藤 1988 が指摘している。

3. 条の強調

当時の実用の縄は、現在と同様に 0 段 3 条であることは、出土例で確認されている。先史土器全般で多用される 0 段 2 条は、節を目立たせるための原体であり、摸擬刺突列として適性がある。花積下層～関山式で多用される 0 段多条の原体による縄紋は、節よりも条の方向線を示

すことに向いている。花積下層式で無節が多いのも、同趣旨だろう。

4. 縄紋と文様の互換性

土器の装飾体系における縄紋の位置づけについて、一部では誤解があるように思われる。手書きで線描した図形表現のみが「文様」であり、縄紋は文様ではない、というような捉え方である。山内の用字を根拠とするが、さて、そうすると、山内は前期の文様帯をどう捉えていたとするのだろうか。円筒下層式前半の、体部の縄紋と異なる口縁部の結節回転紋を山内は文様帯とし、大木1式の口縁部のループ紋帯も文様帯とみなしたのではないか。

文様と地紋が区別される型式もあれば、文様帯内で塗りつぶし要素として縄紋を用いる型式もある。これらの場合は、縄紋は文様ではないといえる。一方、並列刺突列の代替として用いられる縄紋（茅山下層式等）は文様だろう。羽状縄紋系は、工具や隆線による文様がある一方、異なる部位に施される縄紋も装飾性が高く、方向線を意識しており、準文様とか下位文様とか捉えた方がよい場合が多い。

図9に示した深鉢は打越169住例である。この土器を取蔵庫で初めて目にしたときは、接合や復元の誤りかと確かめた。口縁部文様帯で、沈線や貼瘤による手描きの文様と斜縄紋を交互に繰り返している。手描き文様の幅（水平方向）は、縄紋の施紋単位の長さに近い。前期前半には線描文様と縄紋が互換的であることを示す好例であり、土器製作者が意識していた文様単位（区切り方）も知りうる事例である。

手描き線描文様と縄紋の近さは、縄紋から線描への変化のみではなく、逆方向の変化もある。

5. 結節とループ

結節回転と末端環（ループ）の回転は、曲線的な（蕨手状の）撚糸圧痕を容易に反復させる手法であり（早坂2008）、花積下層IV期（新田野期）に、口縁部文様がある土器の一部に体部

縄紋として採用された。結節は二ツ木期を中心に用いられ、末端環は関山式を通して多用される。8の字結びなどの単純でない結節は、条線の中に節が充填する形となるが、これは蕨手状撚糸側面圧痕と刺切を模したのであろう。結節の原体に、わざわざ撚りが異なる2種を併用することも、撚糸側面圧痕の代替であることを示している。また、結節の全体を見せず、圧痕がJ字（緩い蕨手）状になるよう施紋の手間をかける例が多いこともこれを肯定する。

山内1979は、花積下層III期の多段の文様帯を、I文様帯の重畳（I', I'' …）と解釈した。これは関山式から遡上した解釈であった。しかし、花積下層式の変化をたどれば、森田1985が指摘したように、口頸部の文様帯が分帯したものであり、○a, ○b … と解釈すべきである⁽¹⁹⁾。そのうち2段目以下を、回転圧痕で代替したと考えれば、花積下層IV期（新田野期）に出現することが理解しやすい。

その後、製作・施紋に手間取る結節よりも末端環が好まれ、二ツ木期新段階の貝崎B-23住では体部装飾の8割近くにまでなる。

そして、黒坂が指摘したように、単調を打ち破るため、長足環付の盛行を挟んで環帯・斜縄紋交互構成が優勢になる。これは異種等間隔とも表現できるだろう。

(19) 土器の形態・文様の系統的変遷を分析するために「文様帯」を用いるならば、山内が「I」に束ねた装飾帯群は、甚だ多数に分解せねばならない。

6. 矢羽根志向

IV期（新田野期）の体部羽状縄紋は、幅狭化が注意されてきた。結束の手法によるものがあることが一つの要因だが、装飾全体の志向性も関与していると思われる。III期は、羽状に限らず異なる方向の並行線の組み合わせということを目指しているのに対し、IV期は、横軸の矢羽根状を志向する。口縁部文様帯内の刺切紋が、主幹線の方向とは無関係に矢羽根状となるものが主となり（パッチ状の刺切は、折返し状口縁を用いなくなった代わりに、その鋸歯文を文様帯

内に取り込んだもの)、体部羽状縄紋も幅狭化によって、矢羽根状となる。矢羽根状というのは、並列撚糸側面圧痕が保持してきた特徴であり、それが「地紋」に影響したのである。

7. 文様と斜縄紋の相似化

関山Ⅰ式の口縁部文様帯は次第に幅が狭くなり、体部の縄紋1段分と同程度になる。文様は単調化し、平行斜線が目立つ。体部の斜縄紋に帯内羽状が目立つようになるのは、この連続山形状の口縁部文様の影響だろう(図10)。

間に環帯が挟まるので、方向変化位置を縦に揃える志向は弱い。環帯を挟まない長足環付縄でも、縦軸を揃えて菱形にする意識は強くない。

8. 合撚と組紐

結節と類似した圧痕を残すものとして合撚が出現したという、先学の見解(典拠を失念。下村か黒坂)に異論は無い。

一方、合撚と組紐の製作法の共通性についてはあまり周知されていないように思う。

結束羽状縄紋の原体を作れば、それを折り返すことで合撚ができる(下村や黒坂の報告に出土例がある)。結束羽状にするには、撚りが異なる2種の撚紐を交叉させ、片方の撚紐を折って撚り合せ、のち、もう片方の撚紐を反対方向に折って撚り合わせる。一方、交叉させた後、2種の撚りを時間的に分離せず、同じ方向へ交互に進めると組紐になる。組紐は、右寄りと左撚りが絡み合った状態なのである。もっとも、組紐の出現地域とその出現時期に合撚があったかは検討が不十分である。少なくとも関東地方では、そのような近似性があるゆえに受け入れられたと考える。組紐圧痕は、同じ傾きの節の列による偽条があるが、実際には目立たない。組紐の手法による縄も同様で、数方向の偽条が見えるが目立たない。通常の2段の原体も、0段2条のものが増えていく。0段多条よりも節が目立つ。節が目立ち条が目立たないことでこれらは共通する。一方、条が目立つ合撚は、さらに

条が目立つ付加条に転換していく。黒坂が指摘したように、黒浜式の特徴が胚胎する。

5) 大別の境界

南関東が下吉井式主体だった時期に北関東は花積下層式を代表する系列に連なる土器が主体となる。中期末～後期初頭における称名寺式(中津系)の広がり方と逆である。

花積下層Ⅰ期を花積下層式に含めるのは、当初の設定からの拡張といえる。しかし、それがただちに前期の拡張を意味しない。

この時期の扱いは3通り考えられる。

- a) 花積下層式に含め、前期初頭とする。
- b) 花積下層式に含めず、早期末とする。
- c) 花積下層式に含めるが、早期末とする。

大別の境界は、特定地域の事情ではなく、学史的経緯と広域的並行関係が重要だ。

山内1929では、早期後半の土器と前期前半の区別で重視したのは内面の条痕だった。大別制定時点で、「茅山式」は主に現在の野島式と茅山下層式からなり、先史土器図譜でも同様だが、茅山上層式は当然その射程に入る。

茅山-花積下層間の空白が、戦後に西日本の編年研究から明らかになった。

山内の大別は、後期と晩期の区別をのぞき、概ねまとまりがある(連続性が想定できる)土器群を大別としているから、関東や東北中部で遺跡が稀薄な時期が大別の境界となっている。早/前期境界、前/中期境界、中/後期境界のいずれも、戦後に認識された型式の帰属を巡って議論となってきた。

中村が示した「晩年の山内の見解」(谷藤ほか1994.05、前掲)は、菊名貝塚の下層でも羽状縄紋系が出土することを前提に、それに伴う土器も花積下層式の組成だという趣旨だろう。現・神之木台式や狭義の下吉井式までを山内の花積下層式の範囲とすることはできまい。

大別の境界は、広域的な線が引けることが重要だ。早/前期境界の付近(打越3式頃)には、アカホヤ火山灰という別次元の広域指標もあ

る。生物化石を指標としてきた地質学では、広域的に確実な境界とできる地球物理学的な指標を活用するようになってきている。縄文文化研究も、研究者の合意がとればテフラを指標とできるだろうが、そのような仕組はない。ひとまず土器での大別をどうすべきか考えよう。

筆者はcの立場がよいと考える。広域指標にするには、境界の前後が明確でないと困る。花積下層I期に先行する型式内容は不明瞭で、併行関係もはっきりしない。それよりもI期とII期の境界とした方が、揺らぎが少ない。設定当初の花積下層式にI期は含まれておらず、「神奈川シンポ」での有力な見解とも重なる。

おわりに

筆者が初めて富士見市立考古館を訪ねたのは、大学2年生となった1983年春、富士見市遺跡調査会研究紀要を求めてだったと記憶します。所属していた学内の考古学研究会で、2年生が分担して新入部員へ考古学の初歩を教える「新歓ゼミ」のうち、縄文草創期～前期の土器編年を担当したからでした。前期の土器の勉強は40年に及びますが、年数に見合う成果があ

るかは心許なく思います。富士見市に勤め始めてから34年。水子貝塚の調査・報告や打越式シンポの開催が、貴重な経験となりました。

今回、この一文のために、土器資料の見学に赴くことはできませんでした。過去のシンポジウムや縄文セミナー、土器見会などで実見した経験が基礎となりました。企画・主催・受け入れをされた皆様へ感謝申し上げます。

文献収集にあたっては、国立国会図書館、埼玉県文化財収蔵施設、明治大学博物館図書室、東京国立博物館資料館、城西大学水田記念図書館、栃木県埋蔵文化財センター、古書店などを活用しました。ことに、荒井氏と小出氏が収集し、富士見市教育委員会文化財整理室(旧考古館)に寄贈された縄文早・前期文献が頼りになりました。各位へ感謝申し上げます。

前期前半土器のイメージも、旧考古館に収蔵される打越遺跡等の出土資料に育まれました。収蔵庫には、多くの未報告資料も眠ります。考古学は、新資料に追われるフローの時代から、蓄積された資料から何を引き出すかのストックの時代に移りつつあります。過去の資産を活かしていきたいと思います。(2024年6月稿)

引用文献 *行数節減のため副題、組織名、シリーズ名を適宜略した

- 1928.10 山内清男「下総上本郷貝塚」人類学雑誌 43(10), 463-464
 1929.05 山内清男「関東に於ける繊維土器」史前学雑誌 1(2), 1-30;PL6
 1929.07 山内清男「繊維土器について追加第一」史前学雑誌 1(3), 85-86
 1929.09 甲野勇「資料 万田貝殻坂遺跡」史前学雑誌 1(4), 60-61
 1929.12 史前学会『史前学年報 昭和四年』
 1930.01 甲野勇「東京府下池上町久ヶ原彌生式竪穴に就いて」史前学雑誌 2(1), 17-27
 1930.01 杉山寿栄男「大森貝塚の土器に就いて」史前学雑誌 2(1), 92-97
 1930.01 山内清男「繊維土器に就いて追加第二」史前学雑誌 2(1), 73-75
 1930.01 無署名「学会消息」考古学 1(1), 58
 1930.03 無署名「学会消息」考古学 1(2), 137
 1930.3;(1930.12) 斎藤忠「松島湾内諸島に於ける貝塚調査概報」東北文化研究 2(4);(2(5)), 83-100;(37-49) *1977 東洋書院復刻版による。2(5)は発行されなかったが、同書および中村編 1996p105 に記された経緯で復刻版に収録
 1930.05a 山内清男「斜行縄紋に関する二三の観察」史前学雑誌 2(3), 13-25
 1930.05b 山内清男「繊維土器に就て(追加第三)」史前学雑誌 2(3), 45-50
 1932.08 山内清男「日本遠古の文化 二 縄文土器の起源」ドルメン 1(5), 85-90
 1932.12 田沢金吾「縄文式土器」『大百科事典 第13巻』平凡社, 160-162

- 1933.10 大山柏；宮坂光次；池上啓介「縄紋式石器時代の編年学的研究予報（第一編）」史前学雑誌 3(6)代冊
- 1934.05 鈴木尚「東京市王子区上十条清水坂貝塚」人類学雑誌 49(5), 1-7
- 1935.01 山内清男「古式縄紋土器研究最近の情勢」ドルメン 4(1), 36-44
- 1935.05 甲野勇「関東地方における縄紋式石器時代文化の変遷」史前学雑誌 7(3), 1-63;PL3-5
- 1935.06 編集部「日本石器時代の遺跡と遺物」ドルメン 4(6)
- 1935.06 山崎緑水「武蔵野の川越及び其の附近」武蔵野 22(6), 10-13
- 1936.05 山内清男「日本考古学の秩序」ミネルヴァ 1(4), 1-10 附表
- 1936.10 角田文衛「陸前船入島貝塚の研究」考古学論叢(3), 255-274;PL4-7
- 1937.02a 山内清男「先史発見物記録」先史考古学 1(1), 28
- 1937.02b 山内清男「縄文土器の大別と細別」先史考古学 1(1), 29-32
- 1937.03 山内清男「日本先史時代に於ける抜歯風習の系統」先史考古学 1(2), 53-60
- 1937.05 田澤金吾；大場磐雄；池上啓介；宮崎礼「大串貝塚」史前学雑誌 9(2), 1-24
- 1938.10 江坂輝彌「関東古式縄文式文化に就いて（第一回貝塚研究会例会講演要旨）」貝塚(1), 1-2
- 1939.04 山崎重兵衛「貝塚の研究(1)」武蔵野 26(4), 7-11
- 1939.08 山内清男『日本先史土器図譜第Ⅱ輯 関山式 諸磯式』
- 1939.10 江坂輝彌「横浜市神奈川区菊名町貝塚出土土器に就いて」考古学論叢(14), 56-60
- 1940.03 伊東信雄『宮城縣遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告』奥羽史料調査部研究報告(2)
- 1941.04 矢島清作「千葉県幸田貝塚の竪穴住居遺蹟」古代文化 12(4), 2-20
- 1941.07 酒詰仲男・和島誠一「武蔵国打越貝塚に於ける一住居趾に就いて」人類学雑誌 56(7), 365-373
- 1941.08 白崎高保「東京稻荷台先史遺蹟」古代文化 12(8), 10-21
- 1942.08 江坂輝彌「稻荷台系文化の研究」古代文化 13(8), 417-427
- 1942.09 矢島清作「東京市杉並区井草の石器時代遺蹟 -井草式土器について-」古代文化 13(9), 1-9
- 1943.04 江坂輝彌「南関東新石器時代貝塚より観たる沖積世に於ける海進、海退」古代文化 14(4), 133-135
- 1947.12 甲野勇『図解 先史考古学入門』
- 1949.05 酒詰仲男・廣瀬栄一「茨城県大串貝塚調査報告」日本考古学 1(5)、日本考古学研究所
- 1949.11 桑山龍進「菊名遺跡と其の文化」大正大学史学会 ※未見。謄写版刷
- 1951.05 江坂輝彌「講座 縄文式文化について(その7)」歴史評論 5(3), 84-96
- 1951.08 江坂輝彌「講座 縄文式文化について(その8)」歴史評論 5(4), 83-95
- 1951.12 加藤孝「宮城県上川名貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論文集(1), 183-199
- 1954.03 江坂輝彌「茨城県野中貝塚調査報告」考古学雑誌 39(3・4), 49-58
- 1954.04 清水潤三「横浜市北区下組南貝塚」日本考古学年報(2), 56-57
- 1954.04 西村正衛；中澤保「神奈川県横浜市港北区下田下組西貝塚」古代(1/2), 3-20
- 1955.04 篠遠喜彦「千葉県東葛飾郡二ツ木第二貝塚・第一貝塚」日本考古学年報(3), 42-47
- 1957.03 伊東信雄「古代史」『宮城県史 第1(古代史・中世史)』, 1-171
- 1959.03 加藤孝「考古学上より見た塩竈市周辺の遺跡」『塩竈市史別篇Ⅰ』 1982.09 国書刊行会復刻版, 49-124
- 1959.06 江坂輝彌「縄文文化の発現 縄文早期文化」『世界考古学大系 1 日本Ⅰ 先縄文・縄文時代』, 39-60
- 1959.06 江坂輝彌ほか「日本各地の縄文式土器形式編年と推定文化圏」同上, 卷末付表
- 1960.12 日本大学考古学研究会「神奈川県白幡西貝塚調査報告-1-」日本大学史学会研究彙報(4), 97-109
- 1960.12 林謙作「宮城県桂島貝塚出土の前期縄文式土器群」考古学雑誌 46(3), 179-191
- 1961.03 吉田格「東京都北区飛鳥山公園内関山式竪穴住居址発掘調査報告」武蔵野 40(3・4), 35-40
- 1962.02 日本大学考古学研究会「神奈川県白幡西貝塚調査報告-2-」日本大学考古学通信(5), 2-8
- 1962.03 栗原文蔵ほか『中川貝塚発掘報告』大宮市教委 ※序文日付による。表紙は1961だが発掘が61年12月下旬
- 1962.03 林謙作「山形県野山遺跡の土器」考古学雑誌 47(4), 68-70
- 1962.06 岡本勇・塚田光「栃木県藤岡貝塚の調査」考古学集刊(4), 21-37

- 1963.03 日本大学考古学研究会「神奈川県白幡西貝塚調査報告-3-」日本大学考古学通信(6), 9-10
- 1963.03 坂詰秀一『川崎市新作貝塚調査報告』川崎市文化財調査報告(2)
- 1965.03 小林達雄ほか『米島貝塚』庄和町文化財調査報告(1)
- 1965.07 林謙作「東北」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』, 64-96
- 1965.10 村田文夫「神奈川県野川出土の花積下層式土器について」石器時代(7)石器時代文化研究会, 46-50
- 1966.03 村田文夫「花積下層式土器の諸問題」立正史学(30), 51-59 ※新作Dを引用。本文末尾に(1966.10.4)とある
- 1966.09 渡辺誠・村田文夫「川崎市新作D地点貝塚発掘調査報告」川崎市文化財調査集録(2), 12-31
- 1967.10 井上義安・宮本栄一「勝田市大平遺跡の前期縄文式土器」上代文化(37), 55-60
- 1969.03 神沢勇一『梶山遺跡2』神奈川県立博物館発掘調査報告書(2)
- 1970.03 下村克彦『花積貝塚発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会(15) ※谷井 1971.7 を引用
- 1970.03 岡本勇「下吉井遺跡」『埋蔵文化財調査報告 1』神奈川県教育委員会, 21-38; PL. I-XII
- 1971.03 岩崎卓也「土器」『幸田貝塚第1次(昭和45年度)調査概報』松戸市文化財調査小報(4), 11-13
- 1971.03 山内清男「序」『高島町史 別巻』
- 1971.03 佐々木洋治『高島町史 別巻』
- 1971.07 榎本金之丞「平方貝塚の調査」埼玉考古(9), 32-34
- 1971.07 谷井彪「内畑遺跡第1群土器について」埼玉考古(9), 21-31
- 1972.02 駒形敏郎「関山式土器に関する一考察」考古学ノート(2), 4-13
- 1973.10 保角里志「山形県大石田町庚申遺跡の縄文土器について」山形考古2(2), 19-28
- 1973.11 赤塚長一郎「山形県地方における縄文前期初頭の編年的研究(上)」『最上川流域の歴史と文化』, 41-55
- 1973.02 安岡路洋・庄野靖寿「大宮市新屋敷貝塚 貝崎貝塚の調査」『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉遺跡調査会, 1
- 1974.03 庄野靖寿「関山式土器について」『関山貝塚』埼玉県教育委員会, 105-114
- 1974.11 白鳥良一「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古・歴史論集』, 1-54
- 1975.03 竹島国基『宮田貝塚 昭和47年7月発掘調査報告』小高町教育委員会
- 1975.03 武井則道『新田野貝塚』立教大学考古学研究会
- 1975.03 石岡憲雄「集落址出土の縄文時代土器について」『日立市遠下遺跡調査報告書』, 63-95
- 1975.07 下村克彦「関山期の諸問題 発表要旨」シンポジウム埼玉県における縄文文化研究の現状と課題 ※未見
- 1976.03 中嶋寛「大石田町庚申遺跡について」山大史学(5), 13-47
- 1977.03 宮城県文化財保護協会『亀岡遺跡・金山貝塚』鳴瀬町(1)
- 1977.04 高橋雄三・吉田哲夫「横浜市神之木台遺跡出土の縄文遺物」[港北ニュータウン調査団]調査研究集録(2), 65-99
- 1977.11 秦昭繁・橋爪健『松原』置賜考古学会
- 1977.12 伊東信雄「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」考古学研究 24(3・4), 164-170
- 1977.12 栗原文蔵『殿山』埼玉県遺跡調査会・富士見市教育委員会
- 1978.03 荒井幹夫ほか『打越遺跡』富士見市教委(14)
- 1978.03 庄野靖寿「土器について」『貝崎貝塚第3次発掘調査報告』大宮市文化財報告(12), 41-45
- 1979.03 青木秀雄『高輪寺遺跡』久喜市埋蔵文化財調査報告書
- 1979.04 青木秀雄『風早遺跡』庄和町風早遺跡遺跡調査会
- 1979.11 山内清男『日本先史土器の縄紋』(1961.3 提出)
- 1980.03 鈴木敏昭『足利遺跡』久喜市埋蔵文化財調査報告書
- 1980.03 黒川東遺跡発掘調査団『黒川東遺跡：黒川東土地改良事業に伴う遺跡調査報告書』川崎市
- 1980.03 桑山龍進『菊名貝塚の研究』真陽社
- 1980.03 阿部恵「宇賀崎貝塚」『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎1号墳他』宮城県(67), 55-166
- 1981.03 鈴木敏弘他『成増一丁目遺跡遺跡発掘調査報告』
- 1981.03 黒坂禎二「大古里遺跡第IV地点/住居跡出土土器」『中原前遺跡・大古里遺跡』浦和市遺跡調査会 17, 48-58
- 1981.05 下村克彦「新田野段階花積下層式土器と二ツ木式土器について」奈和(19), 22-35

- 1981.06 高橋雄三「花積下層式土器の研究」考古学研究 28(6), 30-54
- 1981.08 黒坂禎二「第2群土器について」『大古里遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会(19), 95-104
- 1982.01 渋谷昌彦「木島式土器の研究」静岡県考古学研究(12), 188-204
- 1982.03 小出輝雄「花積下層式土器の成立と展開」富士見市遺跡調査会研究紀要(2), 17-31
- 1982.03 佐々木保俊「打越遺跡 169号住居址出土土器について」富士見市遺跡調査会研究紀要(2), 32-42
- 1982.03 山形洋一「結語/土器について」『宮ヶ谷塔第5貝塚』大宮市遺跡調査会(5), 95-101
- 1982.03 小倉均「まとめと考察/井沼方遺跡」『井沼方・大北・和田北・西谷・吉場遺跡』浦和市遺跡調査会(20), 185-189
- 1983.03 佐々木保俊「関山式土器について」『打越遺跡』富士見市教委(28), 344-351
- 1983.04 渋谷昌彦「神之木台・下吉井式土器の研究」小田原考古学研究会会報(11), 1-45
- 1983.07 佐々木保俊「関山式土器について」『人間・遺跡・遺物 -わが考古学論集 1-』, 183-194
- 1983.12 宮崎朝雄「埼玉県」『シンポジウム 縄文早期末・前期初頭の諸問題 発表要旨』神奈川考古(17)別冊, 10-12
- 1983.12 渋谷昌彦「神之木台・下吉井式土器の型式内容の再整理」同上, 34-36
- 1983.12 新井和之「早期と前期の境について」同上, 36-37
- 1984.04 岡本勇ほか「縄文早期末・前期初頭の諸問題 記録・論考集」神奈川考古(18)
- 1984.04 渋谷昌彦「神之木台式土器の検討」神奈川考古(18), 108-119
- 1984.11 渋谷昌彦「花積下層式土器の研究 -側面圧痕文土器を中心として-」丘陵(11), 1-25
- 1984.03 黒坂禎二「第II群土器について」『深作東部遺跡群』大宮市遺跡調査会(10), 288-311
- 1985.03 山形洋一『宮ヶ谷塔貝塚』大宮市遺跡調査会報告(13)
- 1985.03 森田安彦「花積下層式土器について」『貝塚山遺跡発掘調査報告書-第2地点-』富士見市遺跡調査会(24), 190-196
- 1985.12 剣持輝久;野内秀明「高坂貝塚の研究(I)」横須賀市博物館研究報告(29), 1-22
- 1986.05 谷藤保彦「諏訪西遺跡の出土土器について」『中畦遺跡 諏訪西遺跡』群埋文(45), 320-325
- 1986.11 新井和之「文様系統論-関山式土器-」季刊考古学(17), 50-54
- 1986.11 下村克彦「施文原体の変遷-羽状縄文系土器-/巻頭図版 縄文」季刊考古学(17), 63-67;PL
- 1987.03 谷藤保彦『三原田城遺跡・八崎城址・八崎塚・上青梨子古墳』群埋文(59)
- 1987.03 鈴鹿良一「羽白D遺跡/考察/遺物について/土器」『真野ダム X』福島県(183), 272-277
- 1987.09 三田村美彦「縄文時代の遺物」『宿遺跡』北区(2), 27-59
- 1987.10 奥野麦生『タタラ山遺跡』白岡町タタラ山遺跡調査会
- 1988.03 鈴鹿良一「羽白D遺跡/考察/遺物について/土器」『真野ダム XI』福島県(193), 265-272
- 1988.11 折原繁「花積下層式土器の検討」『古代集落の諸問題:玉口時雄先生古稀記念考古学論文集』, 1-16
- 1988.11 谷藤保彦「ニッ木式土器」『群馬の考古学 創立10周年記念論集』群埋文, 89-106
- 1988.12 武藤康弘「東北地方保奥部の縄文前期土器群の編年学的研究」考古学雑誌 74(2), 29-51
- 1989.01 黒坂禎二「羽状縄文系土器様式」『縄文土器大観 1 草創期 早期 前期』, 84-101;297-300
- 1989.03 黒坂禎二「羽状縄文系土器の文様構成(点描)-1」[群埋文]研究紀要(6), 1-28
- 1989.03 丸山泰徳ほか『愛宕原遺跡』福島市(31)
- 1989.03 高橋憲太郎・鎌田祐二『千鶏遺跡』宮古市(16)
- 1989.03 鈴鹿良一「福島県の早期後半から前期初頭の土器群について」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』縄文文化検討会シンポジウム(4)
- 1989.12 西井幸雄・金子直行『下段遺跡』群埋文(87) ※土器については金子が執筆
- 1990.01 川崎純徳ほか『那珂町の考古学』那珂町史編さん委員会
- 1990.10 相原淳一「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」考古学雑誌 76(1), 1-65
- 1990.08 鈴鹿良一ほか「縄文早期後半から前期前半の土器変遷」『第12回栃木・福島埋蔵文化財研究協議資料』 ※佐藤 1994 p395に引用された編年表は、製本された資料集には無し。当日配布資料か?
- 1991.03 森田安彦「16号住居跡出土土器の編年的位置付けについて」『天神前遺跡』蓮田市(17), 383-387
- 1992.01 細田勝・黒坂禎二『上福岡貝塚資料 山内清男考古資料 3』奈文研史料(33)

- 1992.11 藤巻幸男「群馬県における縄文時代早期末から前期初頭土器群の様相」[群埋文]研究紀要(10), 27-62
- 1993.03 黒坂禎二「羽状縄文系土器の文様構成(点描)-2」[埴埋文]研究紀要(10)
- 1993.03 藤巻幸男ほか『五日牛清水田遺跡』群埋文(144)
- 1993.03 杉崎茂樹ほか『中耕遺跡』埴埋文(125) ※縄文遺物は黒坂禎二が担当
- 1993.05 谷藤保彦「群馬県内出土の早期末から前期初頭土器」縄文時代(4), 133-142
- 1994.02 縄文セミナーの会『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』
 谷藤保彦「群馬県における早期末・前期初頭の土器」, 95-153
 金子直行「縄文早期末から前期初頭に於ける羽状縄文系土器群の成立について」, 155-262
 佐藤典邦「福島県の早期終末から前期初頭の様相」, 375-421
- 1994.05 谷藤保彦ほか『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相 記録集』
- 1994.06 吹野富美夫「茨城県における縄文時代早期終末から前期初頭土器群について」[茨城]研究ノート(3), 107-118
- 1995.01 安井健一「沼南町石揚遺跡出土の花積下層式土器」千葉県文化財センター研究紀要(16), 41-60
- 1995.03 吉田秀享「考察/遺物について/縄文土器」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅲ 本文』福島県(312), 1135-1154
- 1995.09 渋谷昌彦「花積下層式土器研究史と福島県内資料の型式分類」『みちのく発掘』, 79-119
- 1996.03 金子直行「花積下層式土器成立期の諸様相」『埴葛地域文化の研究』, 49-78
- 1996.08 中村五郎・編『画竜点睛』
- 1997.03 君島勝秀『滝の宮坂』埴埋文(183)
- 1997.03 安井健一「千葉県下の花積下層式の様相について」『人間・遺跡・遺物 3』, 243-257
- 1997.03 吉田秀享「総括/縄文時代前期前葉の遺構と遺物/縄文土器」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ 本文 2』福島県(333), 335-354
- 1998.03 小葉一夫『多摩ニュータウン遺跡 No.27 遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター調査報告(54)
- 1998.03 千葉県史料研究財団『千葉県史編さん資料 松戸市二ツ木向台貝塚資料調査報告書』
- 1999.03 鈴鹿良一「Ⅱ群2類土器について」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅷ 獅子内遺跡(第4次調査)』, 115-124
- 1999.12 谷藤保彦「花積下層Ⅰ式土器とその周辺」『縄文土器論集 縄文セミナーの会10周年記念論集』, 79-105
- 1999.12 谷藤保彦「関東地方前期/研究の概略;前期前半の研究成果と展望」縄文時代(10), 236-244
- 2000.01 上守秀明ほか『山内清男考古資料12 千葉県幸田貝塚資料』奈文研史料(54)
- 2000.03 鈴木素行「軍靴の下の「蓮田式土器」」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』, 574-589
- 2000.03 峰村篤「境外Ⅱ遺跡の関山Ⅱ式土器が提起した課題」『境外Ⅱ遺跡発掘調査報告書』松戸市遺跡調査会, 74-88
- 2000.05 鈴木保彦編「山内清男縄文講義ノート -於:東京大学理学部人類学教室(昭和28~29年)-」縄文時代(11), 131-206
- 2001.05 青山俊明「花積下層式土器の捺糸圧痕文と充填文の関係について」婆良岐考古(23), 111-118
- 2001.05 上守秀明「結節回転による施紋効果」史館(31), 61-74
- 2002.05 谷藤保彦「群馬県における二ツ木式土器」『地域考古学の展開 -村田文夫先生還暦記念論文集-』, 45-68
- 2004.01 吉田充『小松Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文(433)
- 2004.10 渋谷昌彦「下吉井式土器、木島式土器、花積下層式土器」帝京大学山梨文化財研究所研究報告(12), 147-178
- 2005.03 黒坂禎二「縄文時代の遺構と遺物;結語/縄文時代」『宮西遺跡Ⅱ』埴埋文(310), 451-518
- 2005.03 石坂茂『今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡 縄文時代編』群埋文(350)
- 2005.04 早瀬亮介「阿武隈川下流域における縄文時代前期初頭の土器型式」歴史(東北史学会)104, 82-107
- 2005.05 後藤勝彦「宮城県宮城郡七ヶ浜町左道貝塚の調査」宮城考古学(7), 89-114 さみち
- 2005.11 山内幹夫『福島県文化財センター白河館 時代別研究研修 縄文時代前期前葉』(パワーポイント資料)
- 2005.12 君島勝秀「縄文時代早期末・前期初頭の土器群についての考察」[埼玉県立歴史資料館]研究紀要(27), 43-56
- 2006.02 縄文セミナーの会『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』
 黒坂禎二「二ツ木・関山式土器の変容と細分史」, 1-54
 谷藤保彦「二ツ木式から関山式への土器文様の変遷と異系統土器」, 55-124
 細田勝「関山Ⅱ式土器について」, 125-151

- 堀江格「南東北の様相 -福島県を中心に-」, 209-263
- 2006.02 戸田哲也『下組束貝塚』玉川文化財研究所
- 2006.03 斎藤弘道『茨城の縄文土器』茨城県立歴史館史料叢書(9)
- 2006.03 飯泉達司『田島遺跡(田島下地区)』茨城県教育財団文化財調査報告(253)
- 2006.05 縄文セミナーの会『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討 -記録集-』
黒坂禎二「ニツ木・関山式土器の変容と細分史」, 3-18
谷藤保彦「ニツ木式から関山式への土器文様の変遷と異系統土器」, 19-38
細田勝「関山Ⅱ式土器について」, 39-47
堀江格「南東北の様相 -福島県を中心に-」, 59-71
- 2006.05 後藤勝彦「南境貝塚妙見地区の調査 -陸前地方縄文早期末前期初頭の編年学的研究-」宮城考古学(8), 55-93
- 2006.06 後藤勝彦「宮城県塩釜市桂島貝塚の調査-陸前地方前期縄文土器の編年学的研究(3)」宮城史学(25), 1-20
- 2006.10 後藤勝彦「宮城県河北町南境貝塚北境久保地区出土の早期末前期初頭の土器群」秋田考古学 50, 25-43
- 2007.01 谷藤保彦「茨城県における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学の深層』19-28
- 2007.03 松本美佐子「関山式土器について」『馬場裏遺跡Ⅱ』埤埋文(341), 207-224
- 2007.05 早瀬亮介「相双地域における前期前葉縄文土器の変遷」『考古学談叢』, 161-181
- 2007.07 大塚眞弘・平田健「赤星直忠博士寄贈抜刷・図書等目録」横須賀市博物館資料集(32), 1-58
- 2007.07 平田健「寄贈資料から見た赤星直忠による戦前の考古学研究」横須賀市博物館資料集(32), 59-66
- 2008.01 早坂廣人『平成19年度企画展図録 縄紋多種彩々 ～土器を飾るパターン～』水子貝塚資料館
- 2008.01 奥野麦生『タタラ山遺跡-第2地点』白岡町遺跡調査会(6)
- 2008.02 恩田勇ほか『菊名宮谷貝塚』神奈川県埋蔵文化財調査報告(53)
- 2008.03 早瀬亮介「東北南部における前期初頭土器群の変遷と地域性」『土浮貝塚』角田市(33), 12-51;81-87
- 2008.03 後藤勝彦「貝殻貝塚 -陸前地方縄文前期の編年学的研究4-」松島町(2)
- 2008.06 田中和之「羽状縄文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 2009.03 岡田康博ほか『宮城県室浜貝塚資料(ほか) -山内清男考古資料 17-』奈文研史料(84)
- 2009.04 上守秀明「前期前葉土器群における結節回転の意義(其の1)」千葉縄文研究(3), 29-57
- 2010.03 野内秀明「塩坂遺跡」『新横須賀市史 別編 考古』, 870-880
- 2011 酒詰治男:編『酒詰仲男調査・日録第7集 昭和22年、日録(1) 同(2) 同、調査』東大総合博物館標本資料報告(89)
- 2011.02 早坂廣人「南関東からみた前期前半土器研究の問題点」、『縄文前期土器研究の現状と課題』, 131-160
- 2012.04 上守秀明「前期前葉土器群における結節回転の意義(其の2)」千葉縄文研究(5), 59-74
- 2015.03 向出博之「花積下層Ⅰ式土器と塚田光式土器」『林地区遺跡群』長野原町(30), 43-44
- 2015.05 早坂廣人「阿部正功の人類学と荒川右岸」, あらかわ(16), 53-88
- 2016.02 早坂廣人「『諸磯式』120年史」, 『第29回縄文セミナー 縄文時代前期後半の型式間交渉の諸問題』, 1-34
- 2017.02 早坂廣人「黒浜式から諸磯a式へ -型式間交渉を中心に-」, 『縄文前期中葉の型式間交渉の諸問題』, 101-132
- 2017.05 早瀬亮介「仙台湾周辺における前期初頭縄文土器の変遷と空間変異」物質文化(97), 35-57
- 2019.02 鈴木宏和「縄文時代前期初頭における撚糸側面圧痕紋土器の再検討」潮航(37), 49-78
- 2020.03 鈴木宏和「縄紋回転技法からみた上川名式土器」古代(146), 27-63
- 2020.07 早坂廣人「縄紋土器二系統論の系譜」, 九州縄文早期研究ノート(6), 51-67
- 2021.03 鈴木宏和「上川名式と花積下層式の交流」[埤埋文]研究紀要(35), 1-20
- 2021.09 早稲田大学会津八一記念博物館『山内清男コレクション受贈記念 山内清男の考古学』
- 2023.09 宅間清公ほか『出井南遺跡第2地点発掘調査報告書』(株)東京航業研究所
- 2024.03 谷藤保彦「下吉井式土器の終焉 -東京都井出南遺跡出土土器を中心に-」[群埋文]研究紀要(42), 1-14
- 印刷中 早坂廣人「加曾利B式二分案または大森式という幽霊」地域考古学(8)

南貝塚

蓮田 3

蓮田 2 貝殻外面あり

少量 恒に!!

カヤマ式

その他不明のもの

うちに古いらしいもの一片あり

LVII
蓮田 3
貝殻外面あり

蓮田関山

蓮田 2

混入カヤマ式

及諸磯（繊維なし）

アツデ

XXXII 黒浜小字宿裏

蓮田 3, (モロイソ)

XXXVIII 馬場

蓮田 3, (モロイソ)

AaII 箕輪 モロイソ (1?)

ハスダ (3?)

指扇 XVII カヤマ式

(田戸 I) ⁽¹⁾

並木 カヤマ式 蓮田 3, センキ古いもの (一片)

等々

{ 黒浜江ヶ崎 A 蓮田 3, (モロイソ?)
XXXIV

XXXIX 掛 蓮田 3 (モロイソ?)

XXVI 綾瀬 蓮田 3 (少し許) モロイソ

Ad I モロイソ

Aa XXII 白幡 蓮田 3(?)

XX モロイソ [直前段 3 条の図] 増條[?]

坂堂 { 貝殻腹
縄紋 無節 単節
[底面施 [閉端環の図] の字
紋の図] [結束の図] 結束
無紋

【裏面】

矢上 ⁽²⁾ モロイソ (2)

蓮田式

カヤマ式

野中 モロイソ (1)

蓮田 3 (少しある)

大原 ⁽³⁾ { 蓮田
モロイソ

裏面 ●●紋 カヤマ式

蓮田 [結束の図] 結束あり

江ヶ崎 蓮田 3

モロイソ (▲) ⁽⁴⁾

解読者註

(1) 下でなく I と思われる。

(2) 「正」の第四画を省いたような字形だが、「下」と書きかけて上に直したと判断した。

(3) 大原貝塚は、1937 年に酒詰仲男が服部奉公会研究集録で下菅田貝塚と富士見塚貝塚の間に示した。『貝塚地名表』No. 1311 の会ヶ谷戸が同様の位置にあり、異称として「大原貝塚」が記された。しかし、昭和 27 年に教示を受けて知ったとあり、時期は堀之内式（神奈川県による地名表では勝坂～堀之内）とする。位置はその付近だろうが、戦前に湮滅し戦後に再確認できなかったのかもしれない。

(4) ▲は a と I が重なるか

史料 1 山内史前研メモ（会津八一記念博物館 2021, 図 16）の解読案

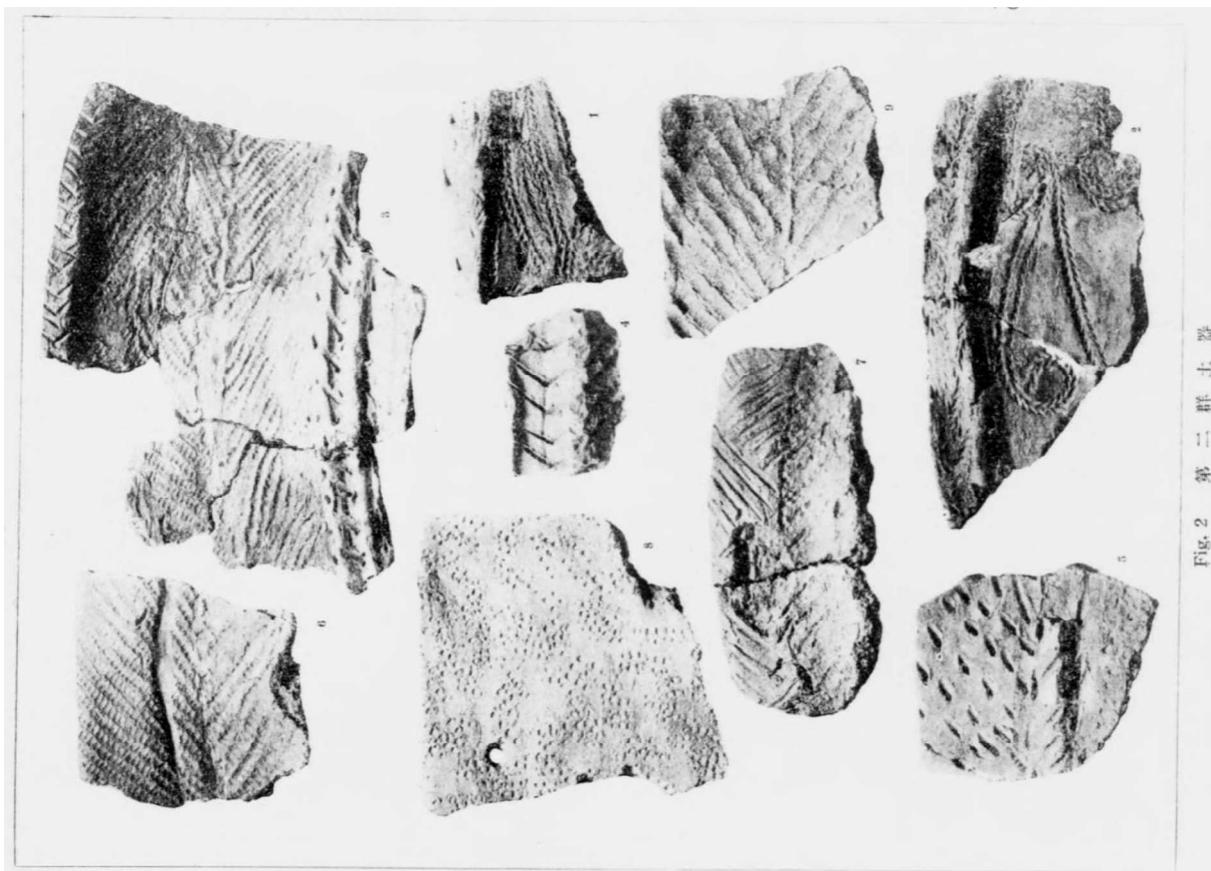
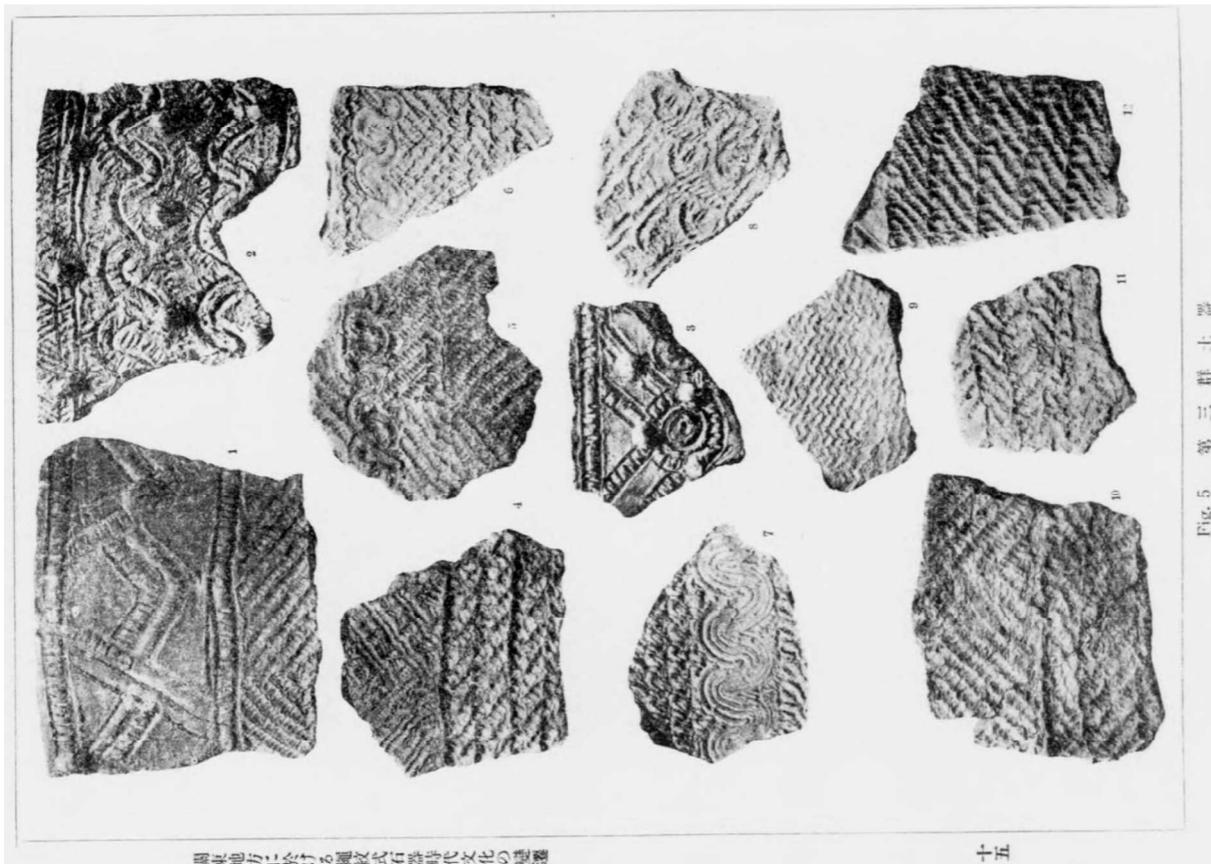


図1 甲野 1935 の第二群（花積下層式）と第三群（蓮田式）

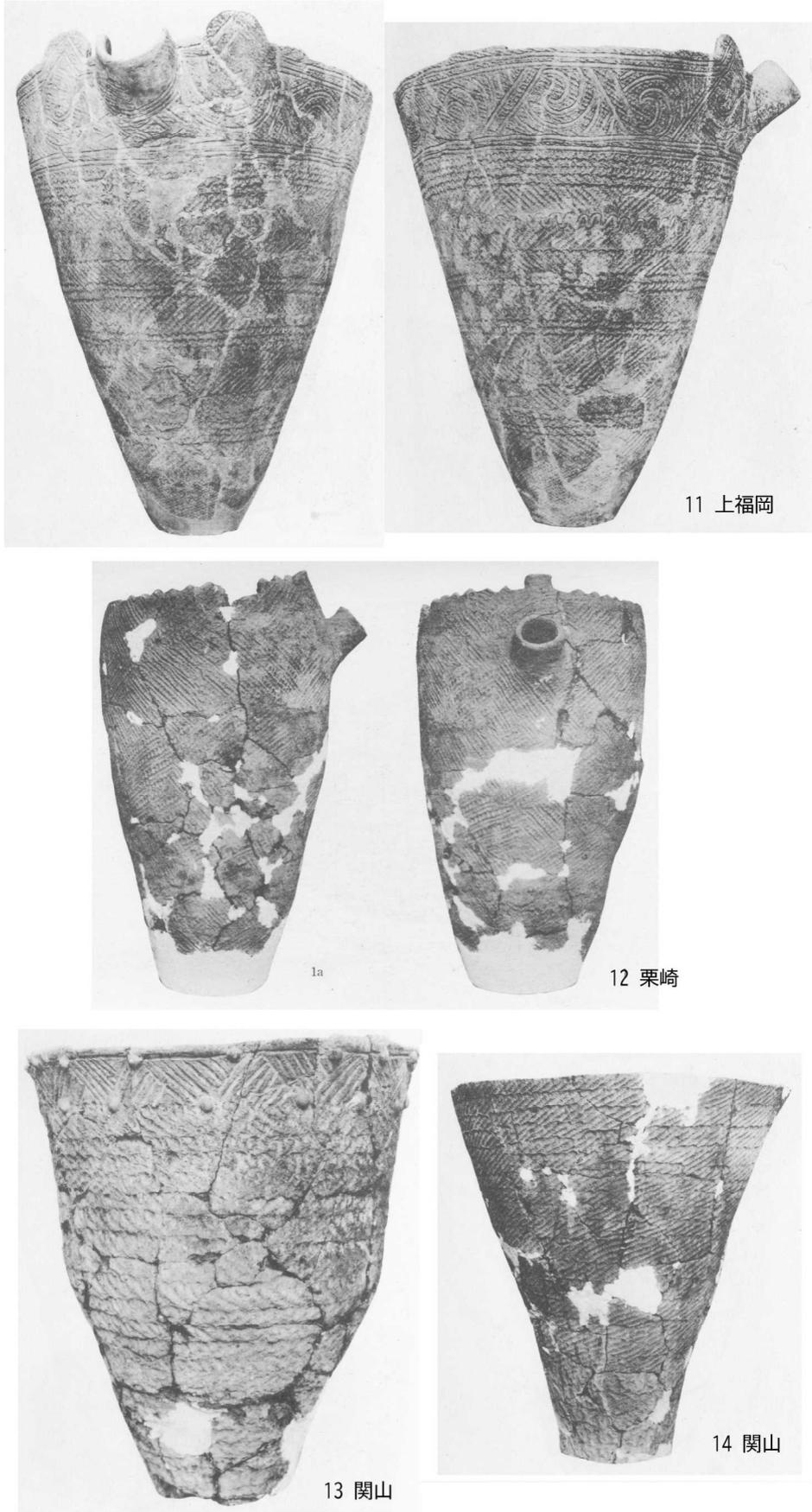


図2 山内 1939 の関山式

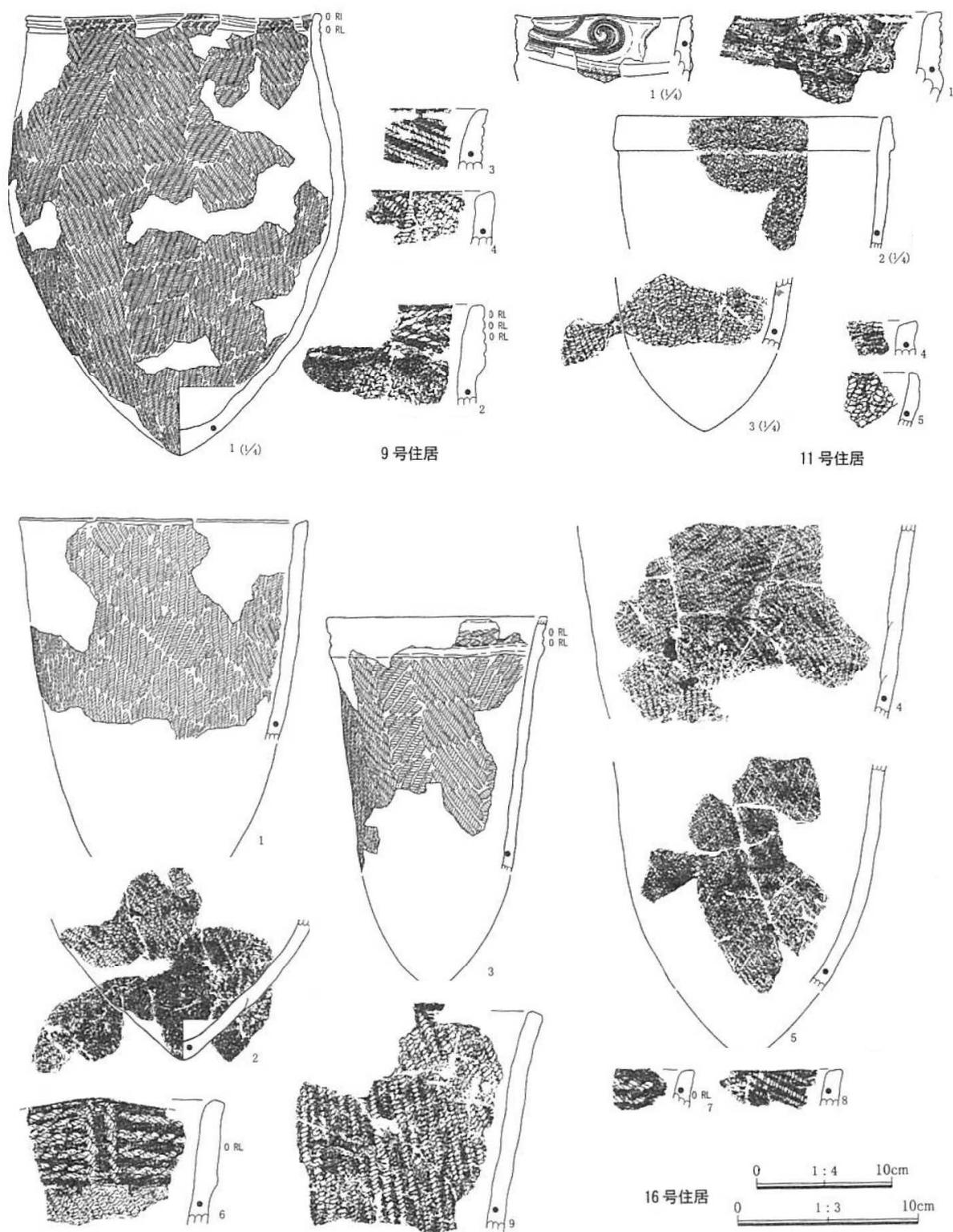
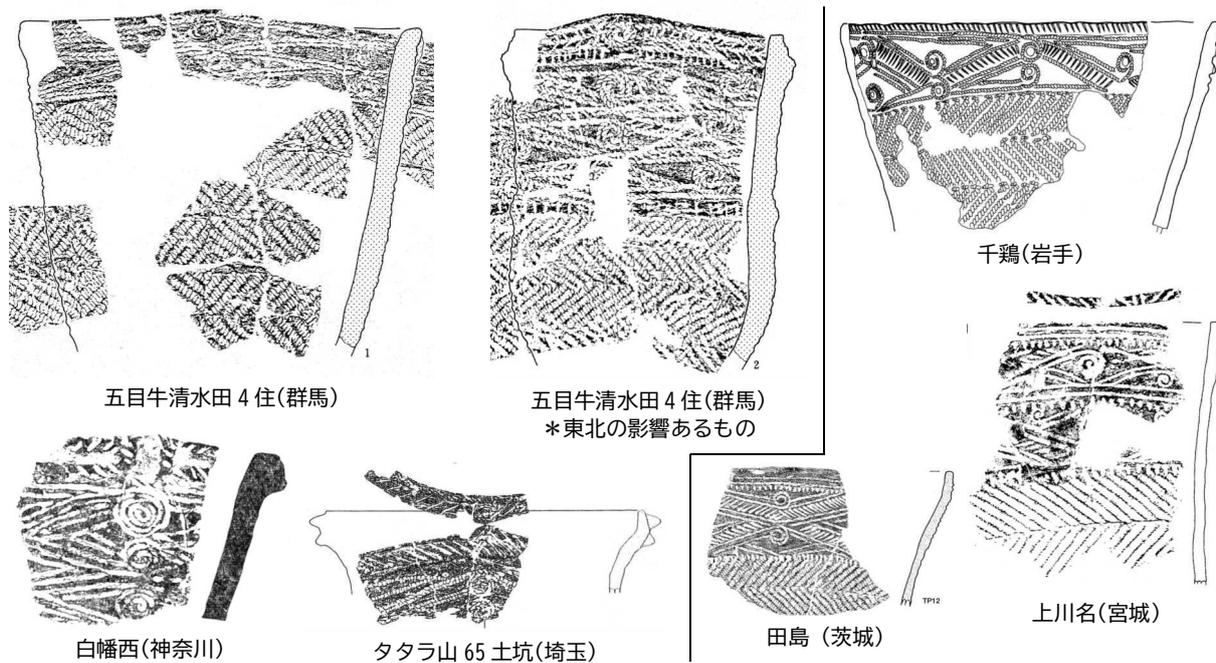
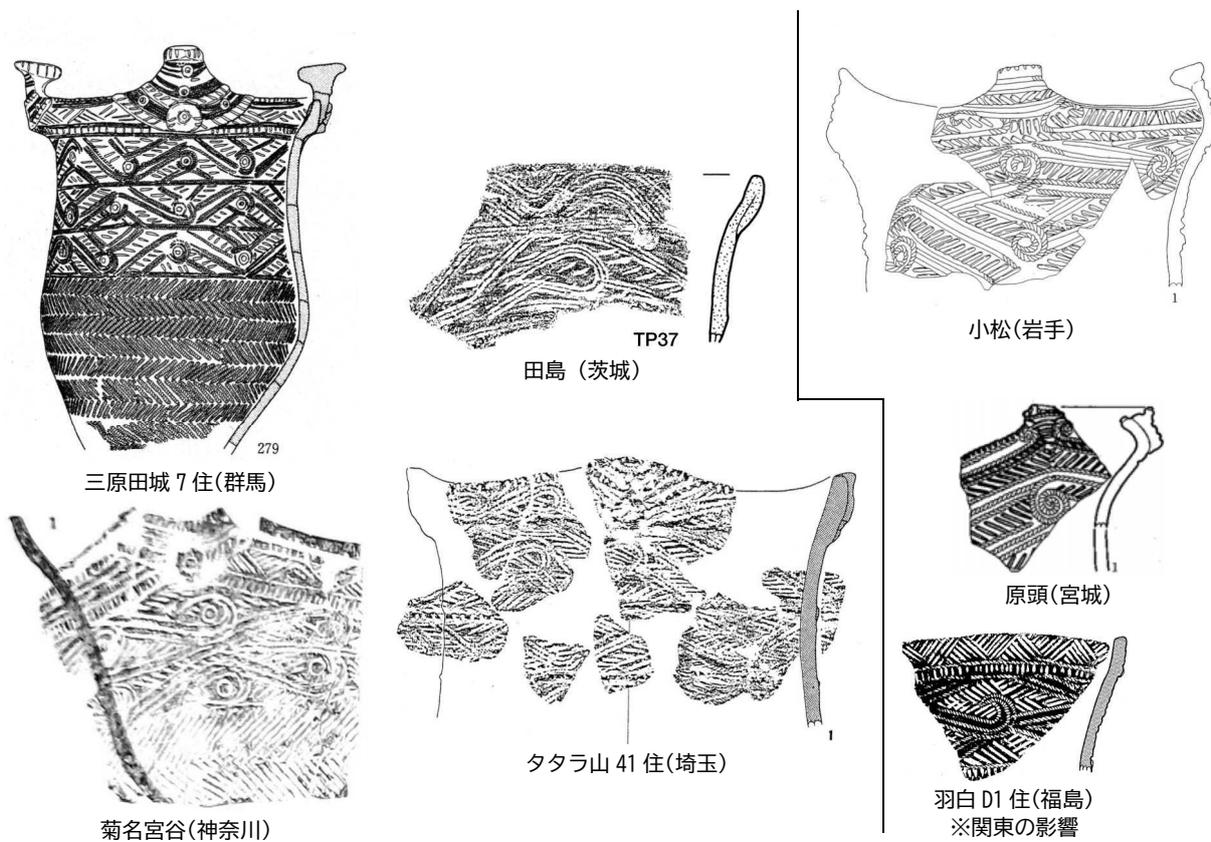


図3 今井見切塚遺跡の花積下層式I期



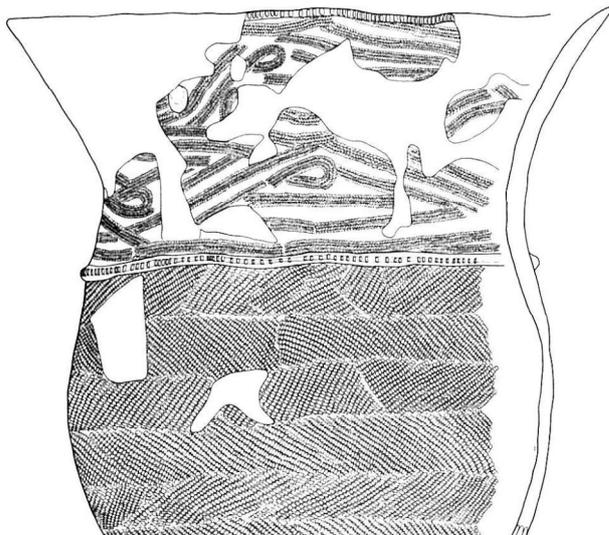
出典：藤巻 1993、高橋・鎌田 1989、日大考古研 1960、奥野 2008、飯泉 2006、早瀬 2005

図4 花積下層式Ⅱ期と、並行する上川名式の燃糸側面圧痕文（縮尺不同）

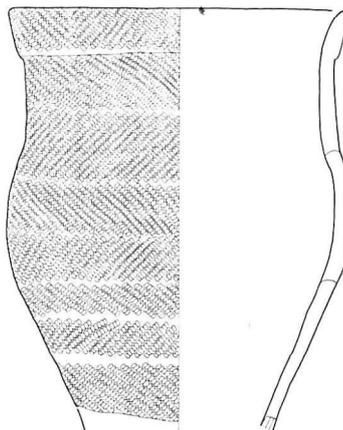


出典：谷藤 1987、飯泉 2006、吉田 2004、江坂 1939、奥野 2008、村田 1986、鈴鹿 1987

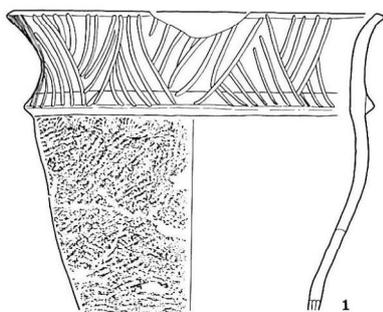
図5 花積下層式Ⅲ期と、並行する上川名式の燃糸側面圧痕文（縮尺不同）



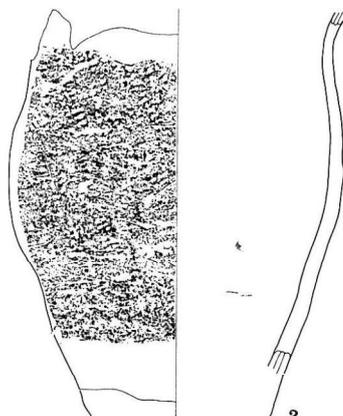
第31図 113・114号住居址出土土器 1 (1/4)



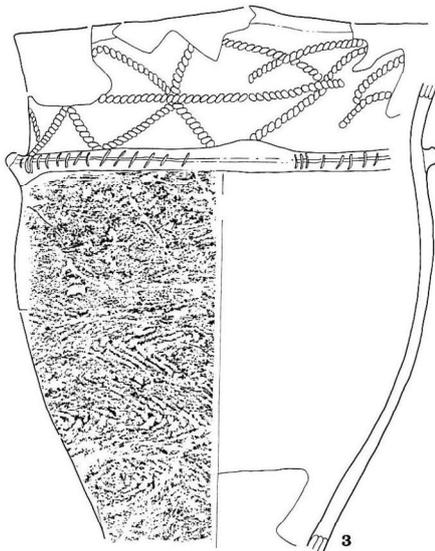
第64図 153号住居址出土土器 1 (1/4)



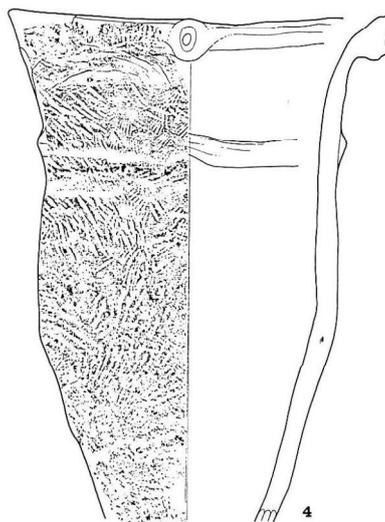
1



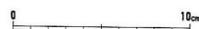
2



3

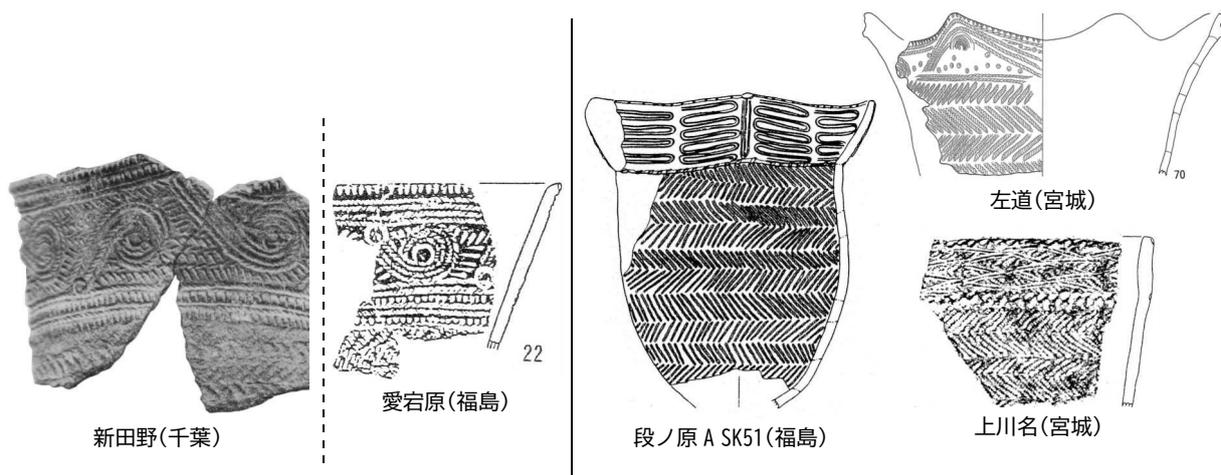


4



第41図 136号住居址出土土器 1 (1/4)

打越遺跡には各段階があるが、ここに示した資料はⅢ～Ⅳ期に比定。136 住の 1・2・4 は貝背圧痕
 図6 打越遺跡の花積下層式(荒井ほか 1983)



出典：武井 1975、丸山 1989、吉田 1995、川村 1991、早瀬 2005

図7 花積下層式IV期と、並行する上川名式

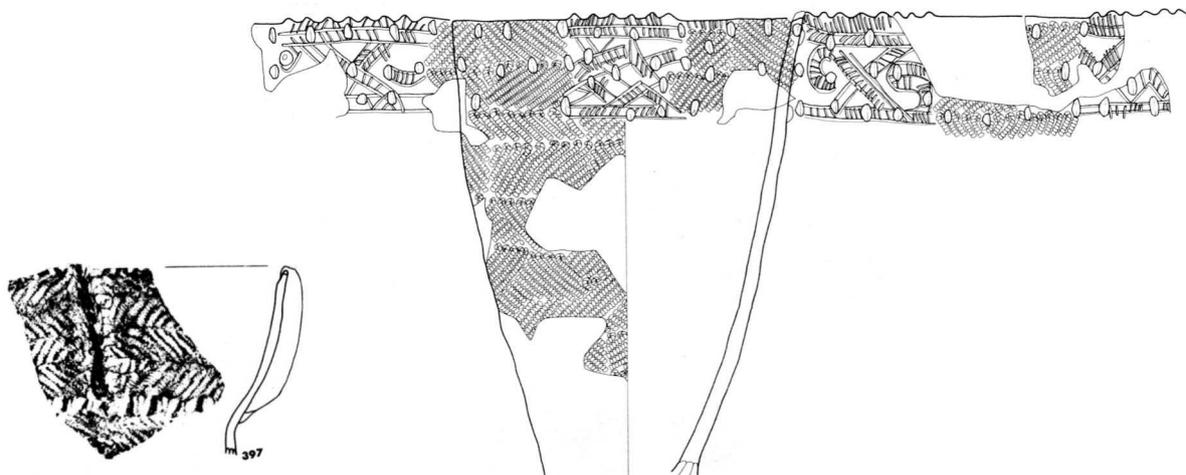


図8 打越包含層例(荒井ほか 1978)

図9 打越169住例(荒井ほか 1983)

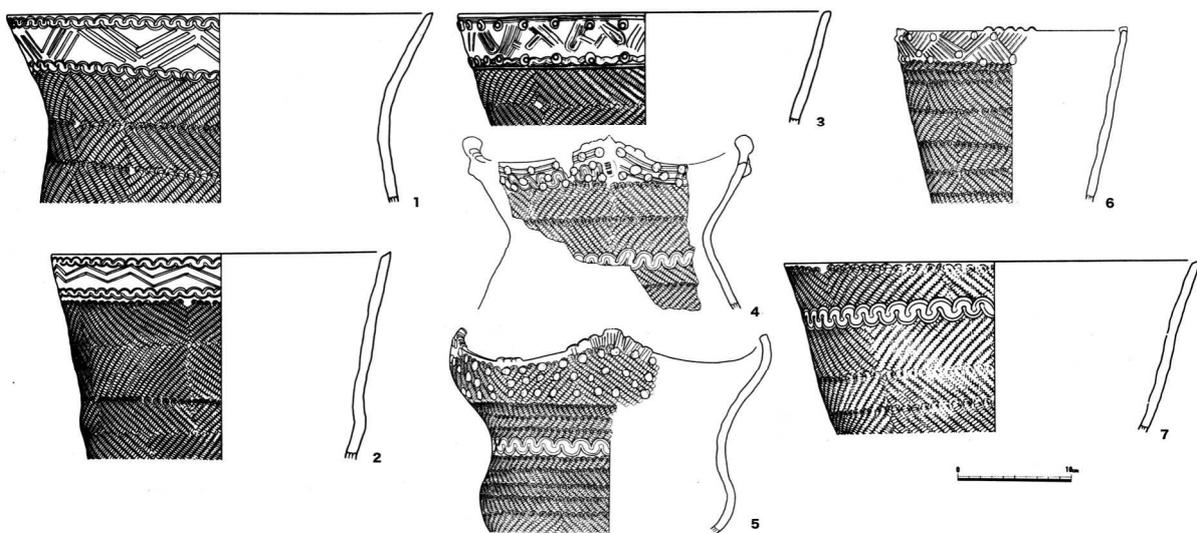


図10 打越88号住(関山I式新段階。荒井ほか 1978)

表1 西関東の花積下層期の主な資料と組成のイメージ

段階	横浜・横須賀	武蔵野台地	大宮台地	赤城山麓	段階
下吉井	下吉井	(打越)	滝の宮坂	今井見切塚	花積下層Ⅰ
下吉井	白幡西	(貝塚山)	夕タラ山1	五目牛清水田	花積下層Ⅱ
花積下層Ⅲ	(菊名上層)	出井南	夕タラ山2・3	三原田城(新)	花積下層Ⅲ
				見立峯	花積下層Ⅳ

無紋・擦痕・條痕系
 貝殻背圧痕
 縄紋系

表2 花積下層～関山式編年案対比表

甲野35	山内36	江坂51	江坂59	駒形72	下村81	黒坂83	渋谷84	森田	谷藤	渋谷96	本稿(早坂2024)		
花積下層	蓮田	花積下層	Ⅰ	上川名(1) +									
												Ⅱ	古新
蓮田	関山	Ⅲ	上川名(3)										
												Ⅳ	(4)
												Ⅴ	(5)
												Ⅵ	(古2) +
												Ⅶ	(新) +
												Ⅷ	大木1

表3 上川名～大木1式編年案対比表

本稿(早坂2024)	早瀬17	早瀬07	鈴鹿99	吉田95	相原90	武藤88	鈴鹿90	鈴鹿89	鈴鹿87,88	林60	加藤59	伊東57	山内36	山内30
花積下層	Ⅰ	第1段階			上川名 a		6	前期初頭	Ⅱ群0類					
	Ⅱ	第2段階			b		7	花下(古)	(1), (2)					
	Ⅲ	第3段階			c	第1	8	花下(新)	(3)	上川名Ⅱ	上川名	上川名	室浜	室浜
	Ⅳ	第4段階			d	第2	9		(4)	野山	船入島	大木1		一型式(?)
関山	Ⅰ			獅子内Ⅱ群 2a類	Ⅱ期	第3段階				桂島 三神峯Ⅲ	大木Ⅰ			
	Ⅱ			2b類	Ⅱ新期	第4段階				大木Ⅰ	大木Ⅰ			

表4 上川名～大木1式編年試案

関東	型式(段階)	福島北部	阿武下	松島湾	三陸南部
花積下層	Ⅰ	(1) 羽白D25, 28J, 羽白C61, 101J	北経塚北Ⅲ		
	Ⅱ	(2) 松ヶ平A13J, 羽白D5, 10, 19J			(小松)
	Ⅲ	愛宕原(古)	上川名(古)	(金山)	千鷲17J, 小松24, 26J
	Ⅳ	(4) 羽白D1J	原頭		小松20住
関山	Ⅰ (宮田Ⅲ群)	獅子内ⅠJ、獅子内Ⅵ区 (獅子内405J)	上川名(新) 宇賀崎	左道	
		下ノ平A	前田	桂島 (金山)	出島山下
	Ⅱ 大木1	上平A	三神峯Ⅱ	大木1	崎山Ⅱd下